

追想　—少女と花畑の
妖怪—【完結】

鷹崎亜魅夜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

太陽の畑の妖怪・風見幽香は思い付きから永遠亭へと赴く。そこで人間のとある少女と出会い――。

人間の少女と花畑の妖怪のひと夏の物語。

目次

最終話	137
第五話	113
第四話	61
第三話	46
第二話	22
第一話	1

第一話

太陽の花がこんなにも美しいものなんだと、初めて知った。

茹だるような暑さの中、風見幽香は日傘をさして歩いてきた。空を見上げようにも太陽は熱波と共に強烈な光を浴びせて来るので、手で目元を隠しながら空を見上げる。

空を見上げるのをやめて、歩を進める。

ふと、騒がしい二人がやってきていた。

「待てこの野郎！」

このクソ暑い中、汗をだらだら流しながら箒に乗つたとある妖精を追いかけている白黒の魔法使い——霧雨魔理沙。そして

「待つかバーカ！」

空中で反転し、口に両手の人差し指を入れて歯ぐきを見せながら「いーっ」と幼子のような仕草をするおバカな氷精——チルノ。その二人だった。

何があつて魔理沙が氷精を追いかけているか分からないが、なにやら面白そうだったので幽香は少し見物することにした。

「……じゃあ、しようがねえか。お前に頼まなくてもどうにかなりそうだしな」

追いかけていた魔理沙は急に箒から降りると、これ見よがしに「はあくくく」と盛大なため息をついていた。どうでもいいが、汗を拭いた方がいいと思う。

「……」

氷精は突然、魔理沙が追いかけるのをやめたのを見て怪訝な表情を浮かべていた。逃げていたのならそのまま逃げれば良いのに、と思ったけど口にしない。だって、その方が面白そうだったから。

「あーあ、どこかに頼りになる、すっげえ妖精いねえかなー（棒読み）」

あんなあからさまな誘導に引つかかる愚か者が居るのだろうか。いたとしたら、相当おバカだと言わざるを得ない。

「しようがないわねーっ」

そこに居た。忘れていた。

あの氷精は短絡思考の生き物だということを忘れていた。元より『妖精』は『人間』よりも格下の存在だ。あの氷精は『妖精』の中でも特別力が強いせいにか己を驕り、口を開くと「あたいつてば最強ねっ」と囁るのだ。

「そ——んなにあたいが必要なのー？」

「うん、マジで必要」

「しようがないなー、特別、力を貸してあげるよっ」

本当にバカね、あの氷精。

本人は得意げな顔をしてデレデレしているの、魔理沙のあのあくどい顔を見ていない。

バカだと思う一方、とても純粹な氷精なのだと思つてしまった。

「……今日はやけに感傷的な日ね」

やれやれ、と首を横に振る。

「どうしてかしらね。でも、考えらえるとしたら……」

幽香はここ数日のことを思い出そうとした。

蝉が五月蠅い。

遠くでアブラゼミとミンミンゼミが競うように大合唱をしていた。誰が勝者を決めるワケでもないのに、よくもまあ、そんなに無駄に騒ぐモノだと感心してしまう。

若葉のような黄緑色の髪が熱を孕んだ風に靡く。赤く鋭い双眸の片目を閉じ、眉根にシワが寄る。端正な顔立ちをしているが、そこには可愛らしさはなく、どちらかと言えば美しさすら感じさせる。

「……あの山を消し飛ばせば、この五月蠅さから解放されるかしら？」

もちろん、そんな事をすれば博麗の巫女に退治（という名の粛清）されるのは目に見

えている。仕方ないので耐えるしかない。それに、あの山にはもう一つの神社があるのだ。

守矢神社。

外の世界からこの『幻想郷』にやってきた、特異な経歴を持つ神社だ。しかも、その神社には二柱の神が祀られている。一柱が本来の有るべき姿だが、どうやら本当ならそこで祀られているはずの神が、別の神との対戦に敗北しその社を奪われてしまったらしい。

「よくそんなことで神をやっつけていられるわね」

まあ、神と言っても所詮は偶像崇拜に過ぎない。憑喪神を神格化したり、悪魔を崇拝するような所もあるのだ。極論、何でも神様になってしまおう。

「どうでもいいか、私には関係ないし」

ふい、と顔を背けて歩を進める。

先ほどの守矢に留まらず、様々な勢力がこの幻想郷に集まっている。賑わっているとさえ聞こえがいいが、それだけ『幻想郷』は多勢の侵略を許しているということだ。由々しき事態だと思ふ反面、それは幽香が戦う機会が増えるといコールだ。

歩を進めると、竹やぶに行きあたった。

「そういえば、あの月の医者たちとはあまり話したことが無かったわね」

迷いの竹林の奥に居を構えている『永遠亭』という診療所。そこに住まうのはどんな薬を持つくれる天才と言われている八意永琳なる女性。

「……妖怪つて病気に罹るのかしら？」

病に罹った事が無いのでその辺の安排は分からない。ともあれ、彼女は人里の健康を診たりするらしい。

興味が湧いたので聞きに行ってみることにした。

天高く生い茂る竹林が日光を遮断してくれるのでそれほど暑くは無い。それでも、日傘をさして歩き進む。

「ん？ 珍しいね、花畑の妖怪がこんな所にいるなんて」

舌つたらずの甲高い声が耳朶を打つ。視線を下ろすと、そこにはウサミミを生やした少女が——因幡てゐがいた。

「私がどこで何をしようかと勝手ですよ」

「そりやそうだが、いいのかい？ 大好きなお花を放っておいて」
「貴女如きに心配されるようなことはないわ」

風見幽香は本体を花畑に残し、自由に移動できる。表現が正しいか分からないが、今の幽香は思念体——幽体離脱をしている様なものだ。幽体とはいえ、物理攻撃も可能な特異があるが。

「丁度良いわ、ウサギ。私を永遠亭まで案内してくれるかしら？」

「別に構わないけどさー……なんか釈然としないんだよねー」

「良いから早くなさい。消し飛ばすわよ」

日傘の先をてゐに突き付ける。先に僅かに光が集まっていることから、ビームを出す準備を始めているらしい。てゐは「わかったわかった！」と諸手を上げた。

「連れて行くよ、全く……。おっかないったらありやしない」

「ぶつくさ言っても消し飛ばすわよ」

「アンタの頭ん中どうなってるんだい!？」

てゐは戦々恐々としながら道案内を始めた。

歩いて数分経った頃だろうか、ドシャアアアアアアツと何かが落ちる音が聞こえた。幽香は振り返りながら音のした方向を見る。

「何かあったのかしら」

「ああ、私が仕掛けた落とし穴に鈴仙が引つ掛かったんじゃないかな？」

身内を罠に嵌めておいて、しれっとしているこのウサギの頭の中はどうなっているのだろうか。

「アンタ、あのウサギの身内でしょ？ なにをしてるのよ」

「んー、最近だけど性質の悪い妖怪がこの辺を荒らしててね。そんなだと人間も永遠

亭に寄りづらいじゃん？ 気休め程度にしかならないけど、何もやらないよりかはマシかなって思ってる」

「空を飛ぶ事のできる妖怪には全くの無意味ね。まあ、だとしても紅の自警隊がどうかしてくれるんじゃないの？」

「あいつは今、寺子屋の教師とくんずほぐれつしてるよ。なんて言ったかな、寺子屋は今、夏休みだって言うやつらしい。んで、寺子屋の教師もヒマを持って余してるから、二人でしつぱりしてるみたいだよ」

呆れた、と幽香はため息をついた。己からその役を引き受けておいて放置とはやる気を感じられない。

「そんな顔をしなさんなって。別にアンタが割を食うワケじゃないんだ」

「それはそうだけれど……。紅の自警隊が居ない今、誰が道案内してるのよ」
「私」

と、てゐは自分を指差した。幽香はそれを胡散臭そうに見下ろす。

「なんだい、その目は」

「アンタが？ どう言う風の吹き回しよ」

「酷い言いようだな、お前さん」

先のことから分かるように、このウサギは悪戯をしよつちゆうする。大概、その標的

叫が聞こえた。

「おや、あの落とし穴から抜け出してきたのか。うーん、もうちよつと深く掘った方が良
いみたいだねえ」

「ちなみに、どれくらいの高さだったの？」

「一反（約一メートル）」

バカじゃないだろうか。

「……よくそんなに掘ろうなんて思ったわね」

「ウサギつてのは穴倉で暮らすんだよ？」

「だとしてもそんなに深く掘らないわよ」

「大きさが大ききだからね。人間的なサイズにすれば、まあ手ごろな高さだと思っけど」

人間の大ききさだとしても三メートルくらいが関の山だと思っのだが。

「ともあれ、アイツに捕まると面倒だからね。私はここで失礼するよ」

そう言つててゐるは脱兎のごとく竹林へと姿をくらませた。ウサギだけに。

絡まれるのも面倒なので幽香はそのまま永遠亭へと踏み込んだ。

純和風の作りとなつており、玄関は老舗の旅館などを彷彿とさせる。靴を脱ごうかど
うか迷つたが、そのまま上がることにした。

廊下を突き進んでいくと、話声が聞こえてきた。

『せんせー、治らないの?』

『そうねえ……。こればっかりはどうしようもないわね』

『せんせーは何でも治せるって村の人たちが言ってたよ』

『何でもは治せないわ。私に治せるのは怪我や病気とかそう言った類のモノだけ』

声からして『永遠亭』の主たる八意永琳のものと、人間と思しき声が聞こえた。人間の声はどこか舌つたらずで、甲高い。先ほどのウサギよりも幼そうな気配がする。

話の腰を折ろうが折るまいが、幽香には関係無い。幽香はそのまま永琳が居ると思われ部屋に入った。

「邪魔するわよ」

「あらあら、今日は千客万来ね」

髪を後ろでみつまみにし、赤と青の衣服を身に纏った女性——八意永琳が顔を上げてこちらを見てきた。

「急患じゃないならあとにしてくれる? お仕事中文の」

「別に病を患って来たわけじゃないわ。アンタとは面識がなかったから、ふらりと寄つたまですよ」

「ウチの輝夜みたいね」

永琳は小さく笑っていた。

「ひっ」

そこへ今まで眼中になかった少女がこちらを見上げるなり短い悲鳴を上げた。永琳は少女の頭を撫でながら言った。

「ああ、そのお姉さんは見た目は恐いけど、中身はもつと怖いからあまり近づかない方がいいわよ」

「良く言うわよ、出奔ついでに部下を殺しまくったヤツが」

「……」

永琳の目に剣呑なモノが宿る。どうやらあまり口外されたくない話だったみたいだが、言ってしまったものは仕方ない。

「さて、それを知っている私やその子どもに、アンタ自慢の頭で作ったお薬でも飲ませて記憶でも消してみる？」

「貴女は大人しくそれを飲むタマじゃないでしょう？ とは言え、この娘には覚えていてもらわれても困るからしようがないわね」

と、永琳が少女を見下ろすと、少女はガタガタ震えながら耳を塞いでいた。

「ふふ、どうやら九死に一生を得たみたいね」

「……そうみたいね」

永琳は苦笑しながら少女の頭を撫でていた。

「大丈夫よ」

永琳がそう言うのと少女はそろりと顔を上げて辺りを確認している。そして幽香を見ると肩をすくませていた。

「……アンタの所為で私が恐がられてるじゃない」

「言つてしまったモノは仕方ないわよね？」

意趣返しのもりだろうか、永琳は少し笑っていた。その笑みに腹が立ったので、顔面に弾幕をお見舞いしてやろうと思つたがやめた。この女にはどうやっても勝てる気がしないのだ。

「まあ、顔を見せるだけだったからすぐに帰らせてもらうわ。そろそろお水をやらないといけないから」

「お花畑の世話は楽しい？」

「人間の面倒を見るよりは遥かに有意義よ」

じゃあ、と言つて去ろうとしたが、服の裾を掴まれた。

「……なによ」

振り返るとそこには涙目の少女が居た。永琳かと思つたので思わず面を喰らつてしまった。

黒い髪を肩口で揺らし、とても可愛らしい顔立ちをした少女だ。

「なによ」

幽香は努めて低い声でもう一度問いかけ見下ろした。ただでさえ凄味のある視線なのだから、すぐに引くものだと思った。しかし、少女は涙目のまま幽香を見上げている。その少女は片手に花を植える鉢のようなものを抱えていた。

(怖いならすぐに引けばいいものを……)

人間の相手をするのが面倒だったが、その為には服を放してもらわなければならない。

幽香はもう一度「なによ」と言った。

「用が無いなら放してくれるかしら？」

「……なを、……さいい」

もごもごと口の中で何かをしゃべっている少女に苛立ちが募る。ただでさえ人間を見下しているところのある幽香にとって、ハッキリと物を言わない人間はストレスの要因でもある。

「ハッキリ言いなさい」

幽香がそう言うのと、少女は今にも泣きそうな顔をして言った。

「お花を、治してください……っ」

普段はすまし顔の幽香だが、こればかりは気が抜けた顔になった。

「……花を、治す？」

言っている意味が分からず幽香は聞き返していた。

「どうやらその人間の女の子、その抱えている鉢をどうにかしたいみたいなのよ」

永琳は肩をすくませながらそう言った。

「今は寺子屋が夏休みつてやつでしょ？ 自由研究の課題として、花を育てるらしいんだけど……花の芽が中々出てこないみたいで、心配になって私に診せに来たみたいなんだけど……ねえ」

永琳は苦笑を浮かべていた。察してくれと言わんばかりの空気を出している。

「……」

幽香は鉢を抱えながら、涙目の少女を見下ろす。

「貴女、バカなの？」

そしてそう言った。

「医者には花を診せてもどうすることもできるワケ無いに決まってるじゃない」

「でも、皆は『えーりんせんせーはなんでもなおせる』って……」

「壊すの間違いじゃなくて？」

ぞわり、と殺気を感じたのでこれ以上変なことを言うのはやめておくことにしよう。命あつての戦鬪なのだから、こんな下らない理由で散らしたくない。

「あの医者か治せるのは人間だけよ。それ以外は治せないわ」

「……私の花、治らないの？」

ついにはぐずり始め、幽香は面を喰らつた。幽香は嗜虐趣味の気があることを自覚しており、泣かすことは好きなのだが、泣かれるのは困つてしまう。

「……つたく、しょうがないわね……」

ぼろぼろと涙をこぼす姿が居た堪れなくなり、幽香は少女の抱えている鉢を奪い取つた。

「あつ」

「待つてなさい」

幽香はそう言つて土に指を突つ込んで花の種らしきものを抜き取つた。

「……」

幽香はその種を見て、なぜ花の芽が出ないのかが分かつた。

「この種、死んでるじゃない」

正確に言えば中身が無い。あるのは種皮を呼ばれる外殻の部分だけ。

幽香はその身に『花を操る』能力を宿している。故に、花に関することであれば何でも分かるのだ。伊達にフラワーマスターなんて呼ばれていない。幽香に花に関することで分からないことなどない。

「大方、鳥か何かに啄ばまれたのね。そりゃ芽が出るはず無いわね」

幽香は鉢を少女に戻すとそのまま背を向けた。が、すぐに歩を止めた。理由は至極簡単。

「……人間のクセに、私をイラつかせるのが上手ね」

少女が幽香の服の裾を引っ張っていたのだ。

「……私のお花、出てこないの？」

「言ったでしょ？ その種は死んでるの。死んだ種からは芽は出ないわ」

死んだ人間は生き返らないくらい自明の理だ。幼いとは言え、それが分からないはずはないと思う。

永琳は何か思いついた様に手を「ぼんっ」と叩いた。

「丁度良いわ。アナタ、今もお花の世話をしているんでしょう？」

「何が丁度良いのか分からないけど……。してるけど、それがどうかしたの？」

怪訝な表情で問いかけるも、永琳は少女の顔を見ていた。

「お嬢ちゃん、そのお姉さんはお花には詳しい人なの。だから、お姉さんに宿題を手伝っ

てもらいなさいな」

「なっ」

「えっ」

幽香と少女の声がユニゾンする。

「別にいいじゃない、どうせ花の世話以外はヒマしてるんでしょ？」

「……花の世話舐めんじやないわよ」

簡単に見られがちな花の世話だが、案外大変なのだ。土を入れ替えたり、害虫が見つからないように程々の量の殺虫剤を使ったり、交配をして新しい種を作ったり、等等。他にも腐葉土を作ったり間引きをしたりなど、体力を多く使ったりするのだ。幾つも思念体を動かさないとやっていられない。

「それに、アナタもいい加減に人に慣れなさい」

「理由が無いわね」

「人と関わると色んな事が知れるわよ。……特にアナタのような妖怪は、ね」

意味が分からない、と言わんばかりのため息をついた。

「私も以前までは人間なんて手足にしか考えていなかっただけ……。医者やるようになってからは色々なものを学んだわ。それこそ、長い時間をかけても得られなかった充実感が一瞬で手に入ったわ」

「アンタ歳は幾つなのよ」

「レデイに歳を聞くのは無作法よ？」

顔は笑っているが雰囲気は笑っていない。でも確かに、幽香も「アンタ幾つ？」なんて聞かれたら消しズミにしている可能性がある。

「ウチの姫様も色々と模索してるみたいだけど……。それはさておき、その娘の手伝いをしてくれる？」

「冗談言わないで。なんでこの私が……」

ちらり、と少女を見下ろす。少女はポカンとしながらこちらを見上げていた。幽香は僅かに眉根にシワを寄せる。

「アナタのお陰で芽が出ない原因が分かったけど、新しい花の種はどうするの？ このままじゃこの娘、一人だけ宿題が出来なかった、てなるわよ？」

「……」

「鳥に啄ばまれたって言うてたけど、その対応も教えないといけないでしょう？」

「……………」

「アナタ、曲がりなりにフラワーマスターと呼ばれてるなら少しくらいその力を役立てなさいな」

「ああもうっ、うるさいわね！ 分かったわよ、やればいいんでしょ、やれば！」

「ごちゃごちゃ言われて面倒になったので、幽香はしょうがなくその役を引き受けることにした。ただ顔を見せに来ただけだったのに、とんだ貧乏くじだ。

永琳は「よろしい」と言って笑っていた。

「お嬢ちゃん、このお姉さんについて行けば新しいお花の種がもらえるわよ」

「……本当？」

ええ、と永琳は頷いた。

「なに、取って食いはしないから大丈夫よ」

言外に「人間に手を出すな」と釘を刺しているのだろう。そんな事を言われずとも、人間なんて相手になどしない。

「……おねいさんは、お花に詳しいの？」

少女は首を傾げながら問いかけて来る。よもや、幽香が妖怪だと思っていないのだろう。それはそれで都合なので、幽香は適当に言った。

「ええそうよ」

「私のしくだい、手伝ってくれるの？」

「凶らずもね」

「少しは素直になりなさいな」

「嵌められたようなものなのに、それでいて素直になれと言うの？」

ジト目を向けるも、永琳はどこか楽しそうだった。

幽香はため息をついて少女を見下ろす。

「行くわよ、人間」

「せつかくなんだから名前でも教えてあげたらいいのに」

本当にイラつかせるのが上手な医者だ。何を言おうと屁理屈をこねて幽香に名前を言わせるつもりらしい。だとしたら、さっさとしてしまおうと思った。

「風見幽香」

「わ、私は……」

「別に言わなくて良いわ。興味ないし」

幽香はそのまま歩きだす。少女はさっさと行ってしまった幽香の後を、とてとてと追いかける。

「……アナタは、人間と触れ合って何を知るのがかしらね」

永琳の弦きは虚しく部屋に響いた。

第二話

ちよろちよろと鬱陶しい。最初に抱いた感想がそれだった。

大人と子どもだと歩幅が違うことを理解していない幽香にとつては、少女が自分の周りでばたばたと忙しく足を動かしている感じがうるさくて仕方なかった。

「はあ……はあ……」

おまけに息切れまでしている。この程度で音を上げる人間の脆弱さが煩わしい。

「……ちよつと」

あまりにもうるさいので幽香は振り返って言った。

「もう少し静かにできないの?」

「ご、ごめんなさい……」

少女は滝のように汗をだらだらと流しながら謝っていた。幽香は知る由もないだろうが、その構図は『自分の子どもにさほど興味も無い親』に見える。

「まったく、これだから子どもは……」

幽香はこれ見よがしにため息をついた。

「ごめんなさい、おねいちゃん。私、生まれつき身体が弱いから……」

少女は申し訳なきように、俯きながらそう言った。

「アンタの身体の事情なんてどうでも良いわよ」

「……」

「さっさと行くわよ」

「……あゝ」

少女は何も言わず、幽香の後を追いかけた。

途中途中で小休憩を挟みつつ、幽香たちは竹林を抜けた。竹林から出るとあり得ないほどの熱波が幽香たちを出迎えてくれた。

「……」

むわっ、とくる空気に顔をしかめ、幽香はそのまま歩く。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

先ほどよりも感覚が短く、息も絶え絶えといった感じの吐息が聞こえた。先ほどうるさいといったばっかりなのに、また言わなくてはいけないらしい。幽香は「あのね」と言いながら振り返る。

「さっきも言ったけど、もう少し大人しく歩けな——」

幽香はそこまで言っただけで言葉を失った。

なぜなら、少女は二メートルほど後ろでぶっ倒れていたのだ。

「……チッ」

幽香はそのぎまみに舌打ちをする。身体が弱いと言っていたが、弱すぎるにもほどがあるんじゃないだろうか。

彼女は忌々しげに少女のところに歩み寄る。少女は小さく痙攣していた。「何寝てるのよ」

そう言葉を投げかけるも、少女は何も答えない。幽香にイライラが募る。

「ちよつと、いつまで寝て——」

ぶわつ、と風が吹いた。片目を閉じながらその風をやり過ぐすと、「とんつ」と何かを着地する音が聞こえた。

「あややややややややつ。これはこれはお花の妖怪さんじゃないですか」
うるさい奴が増えた、と幽香は辟易した。

今しがた現れたのは射命丸文と呼ばれる烏天狗だ。何でも彼女は『文々。新聞』なる情報紙を書く為だけに、この『幻想郷』中を飛び回っているらしい。

簡単に言ってしまうえばただの野次馬だ。烏なのに馬とはこれいかに。

「珍しいですね、アナタがこんな辺鄙なところにいるなんて」

「情報屋が何の用よ」

「いやいや、私の役目は『幻想郷』の情報をいち早く読者様にお届けするのが使命なワケ

でして。空をピューンと飛んでいたら珍しいことに、アナタが居るじゃないですか。これは取材するつきやねーな、つてことで降り立った次第ですはい」

そのまま過ぎ去ってくれればよかつたのに。心の底からそう思う幽香だった。

「花のあるところにフラフラと行くアナタが、花も無い所をうろつくなんて正気の沙汰じゃないですからね。これは何か裏があるんじゃないかと、ジャーナリストの勘が告げておりますっ」

「アナタは私をなんだと思ってるの?」

怪訝な表情で問いかけるも、文は聞いている様子が無い。

「むむっ、そこで倒れているのは人間じゃないですか? おおっと、ここでスクープですか!?! もしかしてアナタが殺っちゃったんですか!?! こんないたいけな少女を!?! あややややや、これはシヨツキングですな。こう言つてはあれですが私、アナタは思慮分別の付いた妖怪だと一目置いていたんですけどね。いやはや、人は見かけに寄らないですね。人じゃなくて妖怪ですが。まあ、妖怪の自分は人間を襲うことにあるんですけど、こんな白昼堂々とやるなんて、ちよつと考えられないですね。あれですか、欲求不満なんですか? えー、だとしても若すぎやしませんかね? 見た感じだと一〇にもいつて無い感じじゃないですか。どれだけ青い果実が好きなんだよ、果実じゃなくてまだ蕾じゃねえかとツツコミを入れてしまいますよ。どれどれ、まだ息はあるんです

かね？」

よくもまあ、そんなに舌が回るものだと感心してしまう。そして後でぶっ飛ばそうと思つた。

「……………え？」

ふいに、文は動きを止めた。そして文の顔色がどんどん悪くなっていく。

「どうかしたの？」

「どうもこうも！」

文はバツと顔を上げると差し迫つた表情を浮かべながら言つた。

「この娘、熱中症じゃないですかっ！」

幽香は彼女が慌てている意味が分からなかつた。

「あやややややつ!!? どうしまししょうどうしまししょう!? そうです、ここはまだ『永遠亭』の近く! この『幻想郷』で最速の私が急いで運び込めばまだ……………」

言うが早い、文は少女を抱き抱えると飛ぶ準備を始めていた。

「ちよつと、何してんのよ」

「ちよつと黙っててください！ 時は一刻を争うんです！」

文の劍幕に少し押されてしまった幽香はそれ以上何も言えなかつた。そして文は少女を抱き抱えたまま『永遠亭』へと向かつた。

「……なんなのよ、全く……」

釈然としないながらも、幽香は遅れて文の後を追つた。

少し遅れて『永遠亭』に着くと、疲れた様子の子の文が壁に寄りかかつていた。

「つ、疲れました……。今期最速なんじゃないんですかね……」

「アナタは何をそんなに慌ててたのよ」

ぐつたりとした様子の子の文は視線だけを寄越してきた。

「アナタという妖怪は……。いえ、なんでもないです……。私のように、人里に近い妖怪じゃないアナタには分からないでしょうし」

カチンとくる物言いだ。幽香はそれに対して何かを言おうとしたが、「あら」と声が聞こえて言うタイミングを失ってしまった。

「また会ったわね」

「……」

「それはそうとアナタ、あの娘をあんな状態になるまで放っておいたの？ その天狗が抱えて持つて来なければ間違はなく死んでいたわよ？」

永琳はふう、とため息をついていた。

「あの程度の距離を歩いただけで死ぬなんて……本当に人間はヤワな生き物ね」

「私たち妖怪が頑丈に出来てるだけです。人間だってその気になれば長生きできますよ。まあ、精々一〇〇歳が関の山ですが」

文は額から流れる汗を拭おうとせず、肩をすくませて言った。

「あの人間の娘はどうしてます？」

文が問いかけると永琳は腕を組んで答えた。

「取りあえず処置はしておいたから大丈夫でしょう。今はウドンゲに診てもらってるわ」

「そう言えば、あの小さい兎はどうなったの？」

「てゐることかしら？ てゐなら……」

永琳はちらりと廊下の隅に気の毒そうな視線を送っていた。そこには目の焦点が合わず、口から涎を垂らしながら「うえひつ、うえひひひひ」と笑っている、見るも無残なてゐる姿があつた。

「どうせウドンゲを罫に嵌めて、捕まつて幻覚か何かでも見せられてるんじゃないかしら。いつものことだし、気にしなくていいわよ」

いつもあんな状態にされるのだろうか、とか。結局は捕まるのか、とか。そんな事を考えているのは、なにも幽香だけじゃないだろう。座り込んでいる文までもが気の毒そうな顔をしている。

「今日も『永遠亭』は平常運転の様ですね」

「お陰さまでね」

「さてと、私はそろそろ取材に行くとしましよう」

文は立ち上がると、そのまますたすたと玄関へ向かった。

「ついでだし、ウチの姫様の相手をしてくれると助かるのだけど」

「竹林が燃える真相を聞かせてくれるなら、いくらでもお相手しますけど?」

「残念」

永琳は特に残念がつてる様子も無かつた。

「それでは私はこれで」

ドンツ、と音がしたかと思えば文は勢いよく飛び立つて行つた。幽香と永琳はそれを見送る。

「……アナタに言つておくことがあるわ」

先ほどとは違つて、永琳の声の質が硬い。真面目くさつた話なんだろうな、と幽香はため息をついた。

「あの娘はとても身体が弱い。それこそ、他の人間よりも遥かに」

「だからなによ」

「もうちよつと気を使つてあげなさいつて言つてるのよ」

なぜ自分が弱い存在に気を使わなければならないのだろうか。

そんなことが顔に出ていたのか、永琳は大きなため息をついた。

「あの娘は特殊な病気に罹つていて、次に大きな怪我をしたら間違ひなく助からないわ。

あの娘は自分で血を造れないの」

ぴくり、と幽香の眉が動いた。

「自分で造れない？」

「そう言う病気に罹つているの。だからときどき、ここに来てもらつて点滴を打つてるのよ」

そんな病気があるのか、という驚きと同時に、人間はなんて面倒な生き物なのだろう

と思わされた。

「誰があの人間を連れてきてるのよ」

「ウドンゲに決まってるでしょう？ 私は薬を創ったり他の患者の相手をしたり、姫様

の相手をしたりで忙しいの」

ふう、とため息をつく永琳。今度のため息は純粹に疲れから来るものかもしれない。

「全部を理解しろだなんて言わないわ。ほんの少しでも良いから、あの娘のことを思っ
てあげてって言うてるの」

幽香は顔をしかめる。そんなの、幽香には関係の無い話だ。あの人間の少女がどんな
病気に罹っていようと幽香には微塵も関係が無い。

「……アナタは似てるわね」

ボソリと、永琳がそんな事を言った。その意味を聞き出そうとしたが、奥から「お師
匠様」と声が聞こえた。

ウサミミの少女だ。てるよりも身長は高く、薄紫色の髪に、深紅色の瞳をしたブレ
ザーを身に纏ったウサギ。

「どうしたの、ウドンゲ」

「はい。あの人間の娘の容体も安定しましたし、そろそろ大丈夫かと」

彼女の名前は鈴仙・優曇華院・イナバと、少々長つたらしい。個人を識別するのが面

倒な幽香としては『大きいウサギ』にしか見えないが。

「そう、良かったわ。ついどと言ってはあれだけど、そろそろてゐを許してあげたらいいんじゃないかしら？　いつまでも狂気の中てられてると精神が壊れちゃうわよ」

廊下の端で未だに「けへっ、けへへへへ」と笑っているてゐは、正直、サディストの幽香でも見るに堪えない。永琳の言うように、精神が壊れた患者にしか見えない。

「大丈夫ですよ、お師匠様。私の『狂気を操る』能力は恒久的なものじゃないですから。一瞬の、刹那の快楽を魅せてるだけなので、あと数分もすれば自然と治ります。まあ、その幻覚内での体感時間は悠久に感じるかもしれませんが」

彼女の『狂気を操る』能力で、てゐは永遠とも思える夢を見ているようだ。しかし、現実からすればそれはものの数分程度らしい。なぜか知らないが、とある忍のとある幻の術が脳裏を過ぎった。

「二種の催眠術のようなものです。すぐに我に戻りますよ」

「だといいのだけれど……。……そうだわ。ちよつとウドンゲ、こつちに来て。それで、アナタはそこで待ってて」

幽香の了承も取らず、永琳はウドンゲに近づくと何か耳打ちをしていた。鈴仙もふんふんと頷きながらこちらを見ている。視線がばったりあった。廊下が暗い所為か、鈴仙の目が赤く光ったように見えたが、鈴仙はすぐに永琳との話に戻った。

話し合いが終わったのか、永琳と鈴仙は離れた。

「ついでだからアナタ、あの娘の所に来てくれる?」

出し抜けに、永琳はそう言った。

「なんで私が」

「アナタの所為で倒れたのよ。アナタが面倒を見ないでどうするの?」

永琳の言うコトは正論だったので、幽香は舌打ちをして土足のまま廊下を歩いた。若干だが、鈴仙が何か言いたそうな顔をしていたが、幽香がジロリと睨み、目が合うとと委縮していた。

「ごっちよ」

永琳は気にも留めずに先を歩く。その後ろを幽香が続き、その後ろに鈴仙が続く。某ゲームのような行進となったが、気にしない。

少女がいると思われる部屋に辿り着くと、永琳は襖を開けた。

少女は布団に横たわっていた。腕には透明な細い何かが付けられており、その何かを視線で辿っていくと、上には何やら赤黒い液体の入った袋がつるされていた。

初めて見る、幽香の理解の範疇を越えた物体に、さしもの幽香は気味が悪そうにして
いた。

「何、あれ」

「見ての通り血よ。その中に生理食塩水やブドウ糖など、その他栄養を溶かしてあるから一概に血液とは言い難いけど」

永琳が丁寧に説明をするが、そんなことはどうでも良い。どうせ説明されても理解できないだろうし、しようとも思わない。

「私は何をしてるのかと聞いたのよ」

「説明が足りないから分からないわよ。……言っただしょ？ あの人間の娘の身体は遙かに弱いと。ああやって、外部から血を与えないと生きていけないの」

少女からは「すー……すー……」と規則正しい寝息が聞こえてきた。

「哀れだと思っただ？」

永琳に問われ、幽香は答えた。

「所詮は脆弱な人間ね」

「感想を言えだなんて言っただけ無いわ。質問に答えて。私は哀れかどうかを聞いたの」

「……」

再び永琳に問われ、幽香はため息をつきながら少女を見下ろす。

弱い人間の中でも輪をかけて脆弱な少女に、幽香はある種の憐憫を感じていた。これでは死に損ないどころか、生き損ないだ。自分で生きること許されず、生かされている少女に、幽香は何とも言えない感情を抱いた。

「……さて、ね。私にはどうでも良いことよ」

「……少しでも、あの娘を慮ってあげて。あの娘は——」

永琳が何かを言おうとしたが、少女が「んゆ……」と言つて起き上がった。

「んゆ、は……?」

少女はきよろきよるとあたりを見渡す。そして永琳と幽香を見ると、小さく笑つていた。

「おはよう、いざいませす」

「おはよう。気分はどう?」

永琳は歩み寄ると膝を折り、少女の傍らに座った。

「悪く、ない、です……」

たどたどしく答えるも、意識ははっきりしているようだ。

「そう。でも、これからは気分が少しでも悪くなったら周りの人にちゃんとやわ言わないと

ダメよ?」

め、と永琳は少女の額に自分の人差し指を押しあてた。

「あう……。ごめん、なさい……。……」

少女は謝ると、幽香に視線を向けてきた。

「なによ」

「おねいちゃんが、運んで来て、くれたんですか?」

まだ眠いのか、言葉がぶつ切りだった。幽香はイライラしながら答える。

「ちが——」

「ええ、そうよ。あのお姉さんが連れて来てくれたの」

「……ねえ」

永琳が途中で遮った。幽香は恨みがましい視線を向けるも、こちらに背を向けている

永琳は分からない。

「めーわくを、おかけして、ごめん、なさい……。……」

少女は頭を下げる。彼女はどうかやら永琳の言うことを信じてしまったようだ。実際はあの烏天狗が運んだのだが。なんだかごつつあんゴールな気がしてやまない。

「気にしなくて良いのよ。これからはこのお姉さんがアナタの面倒を見てくれるみたいだから」

寝耳に水とはまさにこの事だ。そんな話、聞いた覚えもない。珍しく呆ける幽香をよそに、話は進んでいく。

「アナタの宿題も、ここまで連れて来る役目も、ヒマな時間はアナタの為に使ってくれる
そうよ」

何を言っているのだこの腐れ医者。それではまるで、この子どものお守をしている
ようなものではないか。

流石にこれ以上の厄介事はゴメンなので否定をしようと思つたが、少女は心底嬉しそ
うに「ほんとう!？」と問いかけてきた。

「……」

そのあまりにも純真無垢な笑顔に、幽香は踏鞴を踏んだ。ここで断つたら、否定をし
たら幽香がとんでもない外道になってしまう。

元より、人間のことはどうでも良い幽香だったが、ここまで純粋な笑顔を見せられる
とどうも渋ってしまう。

「……………チツ」

幽香は舌打ちをした。少女はビクツと肩をすくませると、恐る恐る問いかけてきた。

「ダメ、なんですか……?」

「ふふ。あのお姉さんは素直じゃないの。言葉に出さないだけで、分かってくれている

わ

このクソ野郎!! と心の中で叫ぶ。ギリギリと奥歯を噛みながら永琳を睨みつけるが、永琳は悪びれている様子も無い。

「これからはあのお姉さんに甘えると良いわ」

「……」

少女ははにかんだ笑顔をこちらに向けて来る。その笑顔があまりにも眩しすぎて、幽香は視線を逸らした。

ちらり、と少女に視線を向けると、本当にうれしそうに微笑んでいる。

「……」

厄日ね、と幽香は嘆息しながら少女の下へと近づいた。

少女を抱えながら幽香は黄昏に染まる道を歩いていった。本当なら縄で縛って飛んで行けたら楽だったのだが、永琳に「くれぐれも安全に、外道なことを考えず、ちゃんと

その娘を家に送り届けるように」ときつく言われたのだ。

「まったく、なんでこの私が……」

自分の腕に抱かれた少女は小さな寝息を立てていた。あの後、この少女は糸が切れたように眠ってしまったのだ。

人間を抱えながら歩くなど、かつての自分では考えられない所業だ。

「……面倒ね」

落とせたらどんなに楽だろうか。しかし、幽香は「この娘は身体が遥かに弱い」ということを思い出し、舌打ちをした。

「大妖怪たるこの私が、なぜこうして甲斐甲斐しく、人間の、しかもガキのお守をしなくちやいけないのよ……」

ブツブツ言いながら幽香は人間の住まう里に入る。夏場の夕暮れはまだ明るく、外で遊んでいる子どもや、談笑をしている大人がちらほらと居た。

人間は幽香を見ると驚いていた。人間とあまり変わらない見かけとは言え、人里では見た事の無い存在だと思っただのだろう。ジロリと睨むとバツが悪そうに視線を逸らした。

少女の住んでいると思われる家に着く。手がふさがっているので足で扉を叩く。失礼にも程がある。

「はい、どなたかな?」

聞こえてきたのは年老いた、しわがれた女性の声だった。

「良いからさっさと開けなさい」

不遜にもそう言い放つ幽香。中からは「はいはい、ちよつと待つて下され」と声が聞こえる。

がらりと戸が開くと、中からは幽香の身長より頭一つ分ほど小さな老婆が現れた。

「おや、見かけない顔ですな……。どちらさまで?」

「どうでも良いでしょ。さっさとこのガキを引き取つて頂戴」

自分の腕に抱えられている少女を見せると、老婆は「おお」と感嘆を漏らした。

「お医者様のところに行つたつきり戻らないと思つたら……。どこで倒れていたんだろうねえ。孫が迷惑をかけたようで」

老婆は深く頭を下げた。そんなことより、さっさと受け取つてくれないだろうか。

「迷惑ついでに、この婆の頼みも聞いて下され。儂は見ての通り、骨と皮だけで力が出ません。儂には孫を受け取り、運ぶだけの力ありません。どうか運んで下さらないだろうか」

「……」

確かに、この老婆にそんな力があるとは思えない。本当に人間とは脆くも弱い生き物

だと思わされる。

「どこに置けばいいのよ」

「しばしお待ちを。布団を敷かせて下され」

老婆はよたよた歩きながら戻り、押入れから布団を取り出すとえつちらおつちらと敷き始める。

「ここに寝かせてくだされば」

幽香はすたすたと入り、これまた土足で家に行くと布団に少女を置いた。

「じゃあ、私は帰るわ」

役目は終わった。幽香はすつと立ち上がる。

「茶の一杯でも飲んで行って下され」

振り返ると、老婆は人のよさそうな笑みを浮かべていた。この子どもには手を焼かさ
れているのでそれぐらいは構わないだろうと判断する。

「そう」

幽香は再び腰を下ろす。老婆は立ち上がると竈の方へ歩いて行った。

湯が湧くまで手持無沙汰となり、幽香は辺りを見渡す。

一言で言えば質素だった。必要最低限の生活道具があるだけで、贅沢品は一切ない。

「ねえ」

幽香は寛ぎながら問いかける。

「なんでしよう?」

「この子どもの親はどうしたの?」

この時間になれば帰ってきてもおかしくは無い。しかし、一向にそんな心配がないのだ。周りを良く見てみると、二人分の食器しかない。

「……儂よりも早く、死んでしまいました」

老婆の声に悲しみが宿る。

「世は何と酷なものなのでしょう……。儂よりも若い輩が死んでしまうなんて……」

「しようがないんじゃない? 死ぬ時は死ぬ。それだけよ」

人間とはそういうモノだ。争いの無い人里だが、病気などはある。件の少女が罹っている奇病も死に至る要因の一つだろう。あの医者に来てからだいぶマシにはなったよ
うだが。

「そなたの言うことはごもつとも」

老婆は何かを思い出したかのようにハツとした。

「そなたは、孫が奇病に罹っているコトを」

「知っているわ」

つい先ほど、あの月の医者に聞かされた。

自分で血を造れない病気。幽香は聞いた事の無い病気だった。

「孫は生きて一〇になるまでと……お医者様にそう言われました」

老婆は悲しげに湯飲みにお茶を注いでいた。

「一〇ねえ……」

幽香のような妖怪からすれば一〇歳など赤子でも何でも無い。まだ生まれてすらない状態と変わらない。

「その子どもの歳は幾つなの？」

寝てる少女を指さしながら問いかけると、老婆は一拍だけ間を取り

「九つ。六日後に一〇の誕生日を迎えます」

幽香は絶句した。

あの月の医者がそう言った計算を間違えるとは思えない。だとすると、この少女の寿命は——余命は六日。それよりも早く死ぬ可能性だつてあるだろう。だとしたら六日以内。

羽化した蟬だって一週間は生きる。それよりも短い。

「孫にとつて、この夏休みは最後になりましょう……」

「……この事をこの子どもは知ってるの？」

いいえ、と老婆は首を振った。

「自分の残りの命を知るとは……まだ若い、幼いこの子に『死』を教えるのは……酷だと、思いませんか？」

老婆は茶の入った湯飲みを盆にのせて持って来た。

「こんな老いぼれには……人間には、どうすることも出来ないことです……。せめて、この子が笑顔で逝けるよう……そう、願うだけです」

奇跡でも起きない限りは。老婆はそう言った。

骨と皮だけで、しわくちやの手で、老婆は少女を優しく撫でる。壊れないように、とても優しく。

「出来ることなら……誕生日は、この子の大好きな花を……見せてやりたいものですな」

花。幽香はその単語に反応をした。

「……どんな花が好きか、知ってるの？」

「それが困ったことに、教えてくれないのですよ」

ほっほっほ、と老婆は楽しそうに笑う。

「下手な鉄砲数打てば当たる……と言いまして、この儂でも出来るだけの野花を集めて来ようと思っっていますよ」

そんな老体では無理に決まっている。この老婆は、この子どものことを愛しているのだらう。

「……」

幽香は寝ている少女に視線を落とす。なぜ永琳があんなにもお節介を焼くのがが分かった気がした。

「……ねえ」

「はい、なんででしょう?」

老婆は首を傾げて問いてきた。幽香は少女の頬を撫でながら彼女に話しかける。

「今日、ここに泊まっても良いかしら?」

第三話

翌日、幽香は少女と共に炎天下の中を歩いていった。

「おねいちゃん、どこに行くの?」

「黙ってついて来なさい」

昨日は幽香がズカズカと進むだけだったが、今日は違った。

幽香は少女の手を引きながら歩いているのだ。

(全く、あんな話を聞かされたから、変な情が移っちゃったじゃない……)

ちらり、と隣を歩く少女を見下ろす。

この少女の残る命は僅かに五日。せめてその間だけは面倒を見ようと思ったのだ。少女が死んだら一時は喪失感を感じるだろうが、すぐに治まるだろうとも思った。

幽香は日傘をさし、少女は麦わら帽子を被っている。少しでも太陽熱から身を守るためだ。

少し歩いていると珍しい人物と遭遇した。

「あら、珍しいですね——珍しいですね!」

わざわざ言いなおしてきたのは守矢の巫女の東風谷早苗と呼ばれる少女だ。幽香よ

りも鮮やかな緑色の髪に、巫女装束を身に纏っている。早苗の視線は幽香と少女の間を行ったり来たりしていた。

「うるさいわね、静かにしなさい。だから所詮は永遠の二番手なのよ」

「なんの話ですか!?! しかも永遠の二番手!?!」

「ガンツとシヨックを受けているようだが、そんなことはどうでも良い。

「そんな事よりも!」

「ビシッ、と早苗は幽香が手を引いている少女を指差す。

「まさか人里から誘拐したんですか!?! いけません! そんな非道、この守矢神社の巫女・東風谷早苗の目が黒い内は許しませんよ!?!」

「アンタの目え別に黒くないじゃない」

「……」

早苗は「こほん」と咳払いをすると

「とにかく退治します! ていやーっ」

やせいの さなえが とびだしてきた

弾幕でもぶっ放して黒焦げにしてやろうかと思つたが「だめええええつ」と少女がそ

の小さな体を精一杯広げながら幽香と早苗の間に割って入った。

「へっ!! やだ、止まらな——」

勢いがついてしまったらしい早苗は急には止まれないようだ。幽香は少女を突き飛ばそうとしたがすぐに却下した。この少女は「遥かに弱い」のだ。かと言って、抱き抱えて飛び退こうにも、何かの拍子でとんでもないことになるかもしれない。

「先に言っておくわよ——齒あ食いしぱりなさい」

「あべしえっ!!」

幽香は持つていた日傘で早苗の顔面をぶつ叩いた。お陰で軌道修正することができ、早苗はごろごろ転がりながら木に激突した。

「…………ふう」

「……最近のストレスも発散できた気がしてスッキリした。

「おねいちゃん、だいじょーぶなの?」

心配した様子の少女が問いかけて来る。

「いきなり襲いかかって来る非常識な人間はぶっ飛ばしていいのよ」

『『幻想郷』では常識に囚われてはいけないんです!』

がばつ、と起き上がった早苗に少女が肩をすくませて驚く。

「何をするんですか幽香さん! 乙女の顔を殴るなんて、アナタの方が遥かに非常識で

すよ! ミラクルフルーツをお見舞いしますよ!」

「黙りなさい、腋巫女二号」

「腋巫女二号!」

ズガンツ、とショックを受ける早苗を見て幽香はため息を吐いた。

「妖怪の山の巫女がこんな所をふらふら出歩いて何してんのよ」

「私は守矢神社の巫女であり、諏訪子様の血を引く者であり、軍神・神奈子様から栄えある風祝の位を承った由緒正しきJKです」

「じゃいけい? なにそれ」

この少女は『外』からやって来たらしい。そのため、『外』の言語を時々使うので、幽香を始めとする『幻想郷』住人からすれば異界の言葉なので意味がさっぱり分からない。「ともかく、私は守矢の信仰を集める義務があるのです。この『幻想郷』に古来からあるあの博麗神社よりも! 頼れる、御利益がある、信仰するに値する! そんな活動を日夜、寝る間を惜しまずしているんです」

どうやら夜は普通に寝るらしい。

彼女は布教活動をしているらしい。博麗の巫女もこれだけ精力的に活動をすれば良いのだろうか、どこかものぐさなあの赤い巫女は面倒がつてやらない。

「それに、お賽銭を貰わないとそろそろ生活も苦しいので」

切実な問題もあるようだ。

「アナタの能力をちよつとでも利用すれば良いじゃない」

早苗は『奇跡を起こす』能力を宿している。その能力を使えば「奇跡的に」守矢の信者が増えるかもしれない。そう言う意味で言ったのだが、早苗はぶんすこ怒りながら言った。

「そんなインチキで信者を増やすなんて、守矢に泥を塗るだけです。心から信じる者が救われる。それが『宗教』です。どつかのズボラ巫女やエア巻物で見世物をしている仏門とは違って、私たちは真剣なんです」

妖怪である幽香にとつてはどれも大して差が無いように思える。

人里近くにある『命蓮寺』なる仏門は人間も妖怪も区別しないようだが、そう言った点で見れば博麗の巫女は人間も妖怪も大して興味が無さそうだし、守矢に至っては二柱の神が居るのだ。ご利益があるんだかないんだか分からない。

「それはそうと、アナタは一体何をしてるんです？ 人間の女の子なんて連れて」

「アナタには関係無いでしょう？」

すげなく言うのと、早苗は食い下がってきた。

「別にいいじゃないですか、教えてくなくても」

「別に教えてあげても良いけど、その代わりに潰れた饅頭みたいな顔面になるかつ、記憶

が無くなるほど全力で殴るわよ?」

「私には関係のないことですよね」

早苗はすぐに引いてくれた。

「しようがないです。私はこのまま人里に向かって布教活動をしてきます」

じゃあね、お嬢さん。早苗はそう言つて人里の方へと向かった。少女は「ばいばい」と手を振りながら早苗を見送っていた。

「あの緑のおねいちゃん、おもしろいね」

「今度会つたら『だから赤には勝てないのよ』つて言つてあげなさい。きっと泣いて悦ぶわよ」

わかった、と少女は元気良く頷いた。

「道草を食つた……というより、バカに遭つたけど先を急ぐわよ」

「あい」

幽香は少女の手を引いて歩いた。

その姿はまるで親子のようだった。

太陽の畑。ここはそう呼ばれている。身の丈を優に超えるひまわりの大群が出迎えてくれた。少女は「わあーっ」と少し興奮気味だった。

「ひまわりがたくさんっ」

「あら、知っていたの」

「うんっ。花言葉は『すーはい』とか『こーき』だよね？ けーねせんせーが作ってくれたお花の本に書いてあった」

驚いたことにこの少女はひまわりの花言葉を知っていた。確かにひまわりには『崇拜』や『光輝』といった意味がある。もしかしたらこの少女、他の花の花言葉を知っているかもしれない。

（そう言えばあの老いぼれ、花が好きだとか言ってたわね……）

ぼんやりと幽香はそんな事を思い出した。

「こんなにくさんのひまわり、初めて見たっ」

少女は駆け出し、クルクル回りながらひまわりを見上げていた。四尺くらいの身長しかないのだから、その三倍はあろうかという巨大なひまわりを見て感動していた。

「あまりはしゃぐんじやないわよ」

うーんっ、と生返事の少女に、幽香はため息をつく。彼女が花に夢中になっている間に、やることはやっつけてしまおう。

「私は少し席を外すけど、ここから絶対に動くんじやないわよ？」

「わかった」

「少しでも動いたらその足、押し折るからね」

凄味を利かせて言うと、少女は「あ、あい……」とビビリながら頷いた。

幽香は花畑の中に入り、目的のモノを探した。それはものの数分で見つかったもので、そう時間をかけずに済んだ。

待ち合わせ（？）場所に向かうと、少女は身体を左右に揺らしながら、今にも動ききたそうにしながら待っていた。

「随分と聞きわけが出来るのね」

幽香がそう言うと、少女は華やいだ笑みを浮かべた。

「ばあばに『大人の言うことはちゃんと聞きなさい』って言われたから」

「人間にしてはちゃんと調教をしてるのね。はい、これ」

そう言って幽香が少女に渡したのは数種類の花の種だった。

「適当に持って来たただだから、育てたいヤツがあったら持って来なさい」

「……いいの?」

少女は小首を傾げながら問うてくる。

「昨日、あの医者に言われたからね」

幽香はそう言つて肩をすくませる。

「鉢に植えて、水をあげたらしばらく放置してなさい。芽が出てきたら詳しい事を教えてあげる」

「私のしくだい、手伝つてくれるの?」

「乗りにかかった船よ」

本当は面倒だが仕方あるまい。

幽香はふと、あの老婆のセリフを思い出す。この夏休みが最後。この少女は五日もしないうちに命を落とすかもしれない。あの老婆だって老い先が短いだろうから、孫との時間を過ごしたいかもしれない。

そんな考えが、幽香の脳裏をよぎった。

「さて、帰りましょうか」

目的は果たした。帰ろうとしたが、少女は動かず、ひまわりの花をじいーつと見つめている。

「なにしてるの、行くわよ」

「……」

それでも少女は動かない。ひたすらに眺めている。

「……しようがないわね」

幽香は手ごろな大きさのひまわりを引っこ抜き、花の部分と茎の部分とに分けた。そして、花の部分に特殊な力を働かせる。

幽香の身に宿るのは『花を操る』能力。少し応用を利かせれば、いつまでも腐らないドライフラワーのような物を作ることが出来る。

（せっかく育てたのに……）

名残惜しいが、間引きだと思って幽香はグツと堪えた。

「ちよつと帽子貸しなさい」

「あっ」

幽香は少女の了承を得ず帽子をはぎ取った。帽子の裏側に、少女の名前らしきものが刺繍されていたが、幽香は特に気にしなかった。そして幽香は麦わら帽子に加工したひまわりを付けた。

「はっ」

ほすつ、と少女の手に麦わら帽子を落とす。

「おねいちゃん、これ……」

「どうせ欲しかったんでしょ？　これだけひまわりがあるんだし、一つくらい恵んであげるわよ」

あくまで上から目線でそう言う。

「……ありがとう、おねいちゃんっ」

少女のその笑みは、太陽よりも眩しく輝いていた。

少女は安らかな寝息を立てていた。老婆はそれを愛おしそうに、幽香は感情の読めない表情でそれを見下ろした。

「ほっほっほ。さぞ嬉しかったんでしょ……。その証拠に、帽子を抱いて寝て居る」
少女は宝物のように帽子を抱きしめていた。

「そなたもこの子に振り回されて大変だったでしょう？」

「そうでもないわ。随分とちゃんと躡てあるじゃない」

人間の子どもは腕白でじっとしているのが苦手だと思っていたが、この少女は幽香の

言うことをちゃんと守っていた。

「どんな飴と鞭を使ったのやら」

「そんなモノは必要ありませんよ。叱る時は叱る。褒める時は褒める。それだけですぞ」

「たったそれだけでこうも従順になるのだろうか。人間とは不思議なものだ。」

「それ以外に考えられるとしたら……貴女が、この子の母親に似ているからでしょう」
「……」

人間と似ている。昔ならそれだけでこの老婆を殺すには十分な理由だったが、不思議なことに今はそんな気持ちも全く起こらなかつた。

「この子の父……儂の倅は、この子が二つの時に死んでしまいました。嫁は儂と娘……三人の食い扶ちを稼がなければならなかつた。嫁は、とても厳しい女でしたな。しかし、ちゃんと娘を愛していた。母の幻影を貴女に重ねているのでしよう。だから、この子は貴女に懐いている」

女一つ手で養つてきた。そう考えるとすごいと言えるだろう。

「孫としては甘えたい盛り……しかし、母は構つてくれず、仕事。儂も昔は身体が動いたからちよくちよく仕事をしていて、家にはこの子一人つきり。……随分と寂しい思いをさせてしまいましたな……」

しわくちやの手で少女の頭を撫でる。

「そんな矢先に、嫁も死んでしまった」

「病気が何かだったの？」

老婆は視線を逸らし、それでも忌々しげにハッキリといった。

「……妖怪に、喰い殺されました」

ドクンツ、と幽香の心臓が強く脈打った。

「無差別に里の人間を襲い、多くの死傷者が出ました……。今こそは近くに聖さまが居られるから大丈夫になりましたが……。それが恒久的なものかどうかは、わかりません」

老婆は悲しそうな表情を浮かべ、少女を撫でる。

「可哀相に……。父も母も失い、残ったのは古い先の短い婆……。儂が死んでしまったら、この子は一人になってしまう」

「……」

幽香は視線を逸らす。その視線の先には、少女の寝顔があった。

「どうか、死なないで下され」

ビクツと肩をすくませる幽香は、本当に珍しい。恐る恐る顔を上げると、目尻に涙を浮かべた老婆の顔があった。

「そなたは嫁に似すぎている……。胸騒ぎがしてやまないのです……。あの子が旅立つまで残り五日……。せめて、せめて、この子に……。ひと夏の思い出を。その短い人生を精一杯楽しむことができた思い出を」

どうか、お願いします。老婆は縋るように、希つてきた。

「……。少し、風に当たってきていいかしら？」

幽香は答えず、そう質問した。老婆は涙を拭い「ええ、構いませぬ」と言つた。幽香は静かに立ち上がり、家から出た。

見上げるとそこには満天の星空があった。キラキラと輝く星々の距離は、近いようである。実は遠い。

それはまるで、人間と妖怪との距離に思えた。

「……。なにを絆されそうになつてるの、私は」

そんなの自分ではない。『風見幽香』ではない。

「……。だとしたら、今の私は誰？」

自分は紛れもない『風見幽香』のハズ。しかし、『風見幽香』は人間などに情を移さない。

頭では分かっているはずだが、幽香は「ソレ」を認めることが出来なかった。

「私は何がしたいの?」

星々に問いかけるも、答えてくれない。

その答えは自分で見つけなければならぬ。

それが、風見幽香に課せられた『しくだい』だった。

第四話

少女の命が尽きるまで残り四日。

今日は沢まで来ていた。なんでも、この少女はあまり人里から遠くに出掛けたことが無いらしい。出掛けた先で大怪我を負ってしまえばそこで事切れてしまうからだろう。老いぼれに「人里から離れてはいけないよ。妖怪が出るからね」ときつく言われていたらしい。

「きれーっ」

初めて見るらしい沢に、少女ははしやいでいた。幽香はそれを日傘をさしながら見守る。

本当なら同種である同年代の人間と遊んだ方がいいのかもしれない。しかし、あの少女は幽香に懐いてしまい、離れようとしなかった。

「……母親に依存していたのね」

幼くして父を失っているらしい少女は、父がどう言う存在であるか分からない。きつと彼女の中心は母親だったのだろう。

少女は水をばしやばしやしながら遊んでいた。

「あまりはしゃぐんじやないわよ」

「うーんっ」

分かってるんだかないんだか。幽香は小さく笑っていた。

ガサガサと背後で音が聞こえたので振り返ると、そこにはいつぞやの烏天狗が居た。

「あややや、見つかつてしまいましたか」

「今日は空を飛んでいないみたいね」

「ええ。山の妖怪がヤンチャしてるらしくて、その身周りを兼ねているんです」

「山にはもう一、二匹の天狗が居たでしょう？ そつちにやらせれば？」

「はたては『暑いからイヤだ』と言って引き籠り、椀は別の領域の見回りです」

どうやらちゃんと働いているのはあの真面目な白狼天狗だけらしい。

「まあ、ヤンチャしているヤツらを見つけたら教えてください。私には裁判権が与えられてるので、私の一存で適当な罰を与えますから」

「襲いかかれたら返り討ちにしても良いかしら？」

「灸を据える程度にしておいて下さいよ？」

文はけたけた笑っていた。

「うみやっ」

後ろから悲鳴と水しぶきの音が聞こえた。幽香は慌てて振り返った。

「どうしたの!？」

幽香は少女に駆けよって無事を確認する。

「ケガは無い、大丈夫？」

「あい……大丈夫です……。滑って転んだだけです」

幽香は「はあく……」とため息を吐き、眉尻をあげた。

「だからはしゃぐんじゃないって言ったでしょう!？ 怪我したらどうするの!？ アンタのところの婆が哀しむでしょうがッ！」

思いの外、声に怒気が含まれていた。少女はビクツと肩をすくませると涙目になりながら「ごえんなしやい」と謝った。とにかく、怪我がないだけでも良かった。

「まったく、心配させんじやないわよ……」

幽香は「次は気をつけなさい」と言って少女から離れた。

岸のところでは文がポカんと口をあけながらこちらを見ていた。

「なによ」

「あ、いえ……。アナタ、本当にあの風見幽香ですか？」

「どう言う意味よ」

幽香はジト目を文に向けた。

「嗜虐愛好家、オーバーキラー、花に対するヤンデレ……。そう呼ばれているアナタが、

ましてや人間を見下している節のあるアナタが……人間の子どもを叱るなんて……。それどころか『心配させるな』と言うなんて……。今日は雪でも降るんですか?」

どうやら妖怪の界限ではそう呼ばれているらしい。自分がどう呼ばれているかなんてどうでも良い幽香はため息をついた。

「しかもあの娘にどれだけご執心なんですか。もう母性全開じゃないですか」

基本的に妖怪は子どもを作らない。寺子屋の教師や雑貨店の店主と言った例外も存在するが、妖怪は父にも母にもならない。文にそう言われようと、どこがどう母性全開なのか分からない。そもそも、母性とはなんだろうか。

「あやややや、これはこれで面白い記事が書けそうですが……。許してくれます?」

「生きたまま内臓を引きずり出されて放置されるのと、死ぬ一歩手前までボコって木の天辺に縛り付けられる……。アナタはどちらがお好みかしら?」

「いやですねー、冗談に決まってるじゃないですかー」

文は冷や汗をだらだら流しながら笑っていた。

「さて、休憩はこれくらいにしておいて見回りに戻りますか。まあ、アナタが居ればあの人間の娘は大丈夫でしょう。任せましたよ」

それでは。文はそう言つて藪の中へと消えて行った。

「……母性……」

幽香は母になった事は無い。妖怪である以上、子を作らないのだから当たり前のことだろう。自分はあの人間の娘の母親に似ているらしいが、所詮は『似ている』だけの本人では無い。

幽香の胸中に、よく分からない感情が芽生え始めているコトは自覚している。果たしてそれは一体、何なのだろうか。

「……考えても仕方ないわね」

幽香は頭を振り、傍の岩に腰を下ろし、恐る恐る遊んでいる少女を見て苦笑いを浮かべた。どうやら、幽香が先ほど言った「気を付けなさい」を守っているらしい。

「おバカな子……」

自然と頬が緩んでいたことに、幽香自身も気づかなかった。

「あれ？」

振り返ると今度は河童が居た。

彼女の名前は河城にとり。妖怪の山に住むエンジニアらしい。良く分からない肩書だが、要は発明家か何かだろうと判断する。

「なによ」

「あー、いや……特に理由は無いんだけど……。アナタがここに居るのは珍しいな、と
思っつて。つて、あれ？ あれつて……」

にとりは目を凝らしながら川で遊ぶ少女を見ていた。

「人間の子どもかい!? 珍しいねえ!」

河童は臆病な妖怪だ。しかし、好奇心の強い妖怪でもある。彼女らは人間を『盟友』と呼び、親交を深めようとアレコレ試行錯誤しているらしいが、臆病であるため、その夢は叶わずにいるらしい。

「もしかして、アナタ……あの人間を狙って……?」

ガクガクブルブルと震える河童に「はっ」と鼻で笑った。

「この私がわざわざ格下を相手にすると思う?」

「……」

「説明は面倒だからしないけど、あの人間の娘のお守をしてるのよ」

「……」

疑わしげな視線を寄越して来るが、じろりと睨むとにとりは冷や汗を流した。

「ま、まあ、最近はこの山の妖怪が悪さして居るらしいからね。アナタくらいの強さを持つ妖怪がそばに居れば近寄って来ないだろうよ」

「アナタ、あの子と遊ばないの?」

幽香はなんとうは無しに問いかけると、にとりは「いやあ」と照れていた。

「恥ずかしいじゃん?」

「このヘタレ」

なにが『盟友』だ。そんなんだから人間と打ち解けられないのだ。

「でも、人間が私たち河童の『盟友』であることには変わりないからね。何かあったら力を貸すし、人間の役に立つ物を作ろうと頑張っているよ」

「そのやる気を対人に回しなさい」

幽香は小さくため息をついた。

「それはそうとなにしに来たのよ」

「いや、少し木材を集めていてね。喉渴いたから水を飲みに来ただけだよ」

にとりはこそそこそししながら沢に近づき、顔を水に突っ込んでいた。

「ふはあつ。ごちそうさん。それじゃあ、私は材料集めに戻るよ」

にとりはそう言つて森の中へと去つて行つた。

幽香は視線を少女へと戻し、その様子を微笑ましく眺めていた。

日もだいぶ傾いて来た頃、幽香は立ち上がった。

「そろそろ帰るわよ」

「あーいつ」

水遊びに厭き、傍の草むらで遊んでいた少女に呼びかける。草むらか妖怪が出てこないとも限らないのだが、幽香は辺りに殺気を飛ばしていたので大丈夫だろうと踏んでい

た。幽香は名の知れた妖怪なのだ。そんじよそこらの妖怪では太刀打ちできない。

少女は立ち上がって歩き始めたが、何かを見つけたらしい。そこで立ち止まってしまった。

「? 何をしてるの、早くしなさい」

少女が来ているものだと思つて歩き始めていた幽香は振り返り、再び呼びかける。少女は何かを迷っているようだったが、言い付けを守るために「わかつた」と言つて駆け寄つてきた。

「今日も楽しかつた」

「そう」

手を繋ぎ、一緒に帰る。それはもう、日課になりつつあつた。

少女の命が尽きるまで残り三日。

今日はどうやら『永遠亭』に行く日らしい。幽香は少女を抱えながら歩いてきた。

「今日も暑いわね」

「あつーい」

蟬が騒がしく大合唱をしている。少女はふと、道に転がっている蟬の死骸に視線をやっていた。

「せみさん、うごかないよ？」

「寝てるのよ」

永遠に覚めない眠り。幽香は遠回しにそう言ったのだが、少女はその言葉をまんまの意味で受け取ったみたいだ。

「おきたらとぶかな？」

「……」

その純粋な質問に幽香は答えられない。そのまま歩を進める。

他愛の無い話をしながら『永遠亭』に辿り着く。少女は鈴仙に預け、自分は呼ばれるまでぶらぶらと歩いていた。

ふと庭に目を向けると、このクソ暑い中、十二単を身につけた黒髪の少女がいた。

「あれは、確か……」

蓬萊山輝夜と言ったか。『永遠亭』の者が姫様を呼称する少女だ。なんでも、月からこの地に逃げて来たらしいが、詳しいことは知らないし、知ろうとも思わない。

幽香の視線に気がついたのか、輝夜は「あら」と口元に手をやった。

「珍しいわね。アナタのような妖怪がここに来るなんて」

「なんだっていいでしょ」

「妖怪でも罹る病があるのかしら？」

「それはあの医者に聞いてみたらどうかしら」

「それもそうね。輝夜はそう言ってくすくす笑っていた。

「でも、どんな存在でも罹る病は知っているわ」

輝夜は幽香に視線を向けながら、意味深な笑みを浮かべながら言った。

「恋の病よ」

「こちらが何も聞いていないのに輝夜はそう答えた。

「鯉の病？ なに、あの半漁人みたいになるの？」

「ありがちな誤変換ありがとう。恋と言うよりは愛の病と言った方がいいかしら？」

「愛の病。幽香は聞いたことがなかった。

「まあ、それは人それぞれ症状が異なるのだけれど。ある者は自分よりも遥かに年下の者を。ある者は同性を。またある者は別の種を。かつて、私に求愛してきた人間も、その病に侵され、死んでいったわ」

輝夜は庭から廊下の縁側へと歩み寄り、腰を下ろした。

「恋は盲目。この場合なら、愛は猛毒……といったところかしら。その毒に侵された者

は、じわじわとその心を腐らせる。愛と言う名の毒が切れたとき、その者は凄絶な症状に苛まされる。その毒が、愛が……大切であれば大切である程、その病は治りにくくなる。その者が死んだあとも、残された者はその『想い』に苛まされる」

輝夜はこちらを見上げながら問うてきた。

「アナタはどうなの？」

「なにがよ」

「愛を知っているのかしら？」

「……知らないわ」

解らない、とは言わなかった。言えなかった。ここ数日で、幽香は『愛』が何なのか、ほんの少しわかった気がした。老婆が孫に向ける視線、言葉、態度、微笑み。それら全てが『愛』によるモノなんだと思ったからだ。だから、幽香のこの答えは一種の惚けに入る。

「知らないのなら結構」

その答えをどう受け取ったかは解らないが、輝夜は笑っていた。

「愛にも多くの種があるわ。純粋な愛、歪んだ愛、友の愛、親子の愛、男女の愛。妖怪や蓬萊人とは違って、脆くて弱い人間の僅かな人生で最も輝かしいと思える感情よ。人の営みとは、そう言うモノなのよ」

輝夜は訳知り顔で、悟った様な口調で語った。

「死んでも『愛』は語り継がれていくものなのよ。『愛』とは永遠で、一瞬なの」
「……理解できないわね」

幽香はそう答えた。輝夜はくすくす笑っていた。

「人は様々な物を忘れる。勿論、『愛』も。なんて悲しいのかしらね。それだけの感情を持つていたのにそれすらも忘れてしまうなんて。『愛』なんて、朽ちてしまうのよ」

この少女は一体、どんな体験をしてきたのだろうか。この少女は『愛』を向けたことがあるのだろうか。

「でも、『愛』とは諸刃の剣……。『愛』と『憎しみ』は、繋がっているのよ」

私とあの娘みたい。と輝夜は言った。あの娘が誰を指しているか今一分からないが、どうせ教えるつもりもないのだろうか。そんな笑みを浮かべていた。

「『愛』を奪ったモノを恨み、妬み、嫉み……。殺したいと思う。『憎しみ』に囚われた心は癒されることはない」

ふと、輝夜の瞳に悲しげな——憐憫の感情が宿っていた。その瞳は一体、誰を写したのだろうか。

「『憎しみ』を癒す唯一の方法は……。『本当の愛』を、知ること」

輝夜は幽香を見上げ、幽香の目を見ながら問いかける。

「『憎しみ』の先に、『本当の愛』があるんじゃないか？ ならば『憎しみ』を超越した時……人は、妖怪は……真の愛情を知れるんじゃないかしら？」

「知らないわよ、そんなこと」

幽香は輝夜から視線を逸らした。そんなもの、分からない。

「……アナタは多分、その欠片をもう持っているわ」

輝夜は不意に、そんな事を言った。輝夜は立ち上がり、廊下にあがるとそのまま消えて行った。幽香はそれを見送り、呆然と立ち尽くしていた。

「幽香さん」

ハッとして振り返ると、そこには鈴仙と少女がいた。

「検査終わりましたよ。こんなところで何をしてたんですか？」

「アンタんとこの姫にワケ分からないコトをずらずら聞かされてたのよ」

「ああ……」

鈴仙は何か納得がいったかのように頷いた。

「なんか最近、仙人みたいなのを言うようになったんですね。悟りを開きたいんでしょうか？」

「だとしたらいち早く人里の仏門にでも入れてあげなさい。あの魔法使いも喜ぶんじゃないか？」

狂喜乱舞しながら巻物を散らかし「なむさーん」と言う様が容易に想像できる。

「そうでしょか。それより、この子をよろしくお願いします」

少女は幽香に近づくと満面の笑みを浮かべた。

「さて、じゃあ帰りましょうか」

「あいつ」

幽香は少女の手を引いて『永遠亭』を後にした。

竹林の中を歩いていると、少女が自分の腕を見つめていた。

「どうかしたの?」

幽香が少女の視線の先に目を向けると、そこには一匹の蚊が止まっていた。

この少女は自分で血を造ることが出来ないのだ。ただでさえ外部から血を与えているくらいなのだから、多寡が蚊に吸われた量でも失ってはいけないだろう。

「ああ」

すつ、と叩き殺そうしたが、少女は「だめっ」と言つて幽香を制した。少女に制され、

面を喰らってしまった幽香はそのまま固まってしまった。

血を吸い終えたのか、蚊は少女の腕から去って行った。案の定、刺された個所は小さく膨れていた。

「なんで殺さなかったの？」

「おかあちゃんが言っていたの」

少女は腕をぼりぼり搔きながら

「どんな小さな虫もいっしょーけんめー生きてるんだから殺しちゃダメって」

幽香は目を見張った。

弱い人間がそれよりも弱い存在を思いやることは、幽香にとってはとても衝撃の大きなことだった。

ましてや蚊など、血を吸うだけに留まらず、病気の菌を運ぶ（永琳がそんな事を言っていた気がする）役割を担っている。下手をしたら死ぬ病気だつてあるそうさ。そんな害悪をもたらすくらいなら殺してしまうのが普通だ。

それでも、この小さな少女はそんな殺生をしなかった。

大人の言うことを守れ。

きつとこの少女は母にそう言つて育てられたのだろう。だから、母の言葉を信じている。

一寸の虫にも五分の魂。確かそんな言葉があつたはずだ。

「かゆいけど、がまんすればいいの」

一通り搔いて治まつたらしい。少女は微笑んでいた。

「おねいちゃんは、殺しちゃうの?」

そう問われ、幽香は視線を逸らす。

「……ええ。かゆいのはイヤだからね」

「でも、お薬を塗ればだいじょーぶだよ?」

「……それもそうね」

幽香はぶつくりふくれた少女の腕を見つめた。

「自分のモノを奪われるのは、釈然としないのよ。どうしても、奪つた者に対してなにかしらの罰を与えたくなるの」

「痛い痛いするの?」

少女が問いかける。幽香は「そうね」と答えた。

「でも、そうね……。無益な殺生は……。ダメよね」

幽香は花を間引く。きちんとしたモノを育てるうえで仕方のない行為とはいえ、花からすれば「ここまで育つたのに殺されるのか」と言いたいだろう。それは果たして、無益と言えるのだろうか。

「花にも命がある……。間引いて記憶から消してしまった、忘れ去られた花の為にも、真摯に向きわないと……。ダメよね」

「おねいちゃん？」

少女は首を傾げていた。幽香はそれを見下ろし「何でもないわよ」と言った。

「でも、覚えておきなさい」

幽香は少女の目を見ながら言った。

「失つても、また蘇るのよ」

間引いたとしても。忘れてしまつても。

種さえ残っていれば。きつかけさえ残っていれば。

何度だって、花は芽を出す。新たな命を芽吹かせる。

少女はポカンとしていたが、すぐに小さく頷いた。

「うん、忘れない。でも、血は吸われちゃった。戻してって言っても、無理だよね」

落胆するワケでもなく、少女はそう言った。

「おねいちゃん、帰ろう？　ばあばが待ってる」

「……そうね」

幽香は少女に引っ張られる形になった。

蚊を殺しても、吸われた血は体内に戻らない。

殺しても失ったモノは返って来ない。

そう、言われた気がした。

少女の寿命まで残り二日。

幽香は少し用事があったので花畑に来ていた。

「さて、目的のモノを探さないとね」

幽香は辺りを搜索し始めた。

明朝、少女は鉢を幽香に得意げに見せてきた。鉢から花の芽が出ていたのだ。寝ぼけていたので種類までは分からないが、取りあえず道具は持って来た方が良さだろう思ったのだ。

「……これくらいでいいかしら」

一通りの道具を揃えた幽香は小さく頷いた。これだけあれば困ることはないだろう。

「あの人間の命も今日を入れて残り二日……」

明日は少女の誕生日。明日以降は、冷たくなっていることだろう。しかし、それは仕方無いことだ。

死とは生まれた瞬間に誰もが平等に与えられるモノなのだ。最初のプレゼントが『死』とは生かすつもりがないのかもしれない。

「人間はやっぱり、弱いわね」

幽香のように強い妖怪には関係の無い問題だ。

「……持つて行かないと。あの子は私が居ないとぐずりはじめるのだし」

幽香は微笑みながら道具を持ちあげた。

彼女は気付いていないが、少女への一人称が「人間」から「あの子」へと変わっていった。

人里に近づくと、妙に騒がしい。幽香は怪訝な顔をしながら辺りを見渡す。

「……」

妙な胸騒ぎがする。幽香は急いで少女の家へと向かった。

「邪魔するわ——」

「おお、そなたか！」

扉を開けると老婆が幽香に縋り付いてきた。

「なによ、どうしたのよ」

老婆は両目に涙を浮かべながら叫んだ。

「孫が消えてしまった！」

幽香から表情が、消えた。

「つい先ほどまではここに居たのに、少し目を離れた隙に居なくなっちゃった！」
ガタガタと震えながら老婆は喚く。

「どこかへ行く時は儂に言うようにと、あれほど言ったのに……っ」

嗚呼、と老婆は土間に崩れ落ちた。幽香は冷静に老婆の腕を掴み、引き上げる。

「捜して来るから、アンタは大人しく待つてなさい」

「し、しかし……っ」

「大人しく、してなさい」

凄味を利かせて言うと、老婆は小さく頷いた。幽香は荷物を置いて家を飛び出し、人里から少し離れたところで叫んだ。

「出てきなさい、居るんでしよう!?!」

幽香の声が一体に響く。

「出てこないならこの辺一带を焼け野原にするわよ!?!」

そう叫ぶと、空間に裂け目が入った。そしてその中から「うるさいわよ」と声が聞こえた。

中からは一人の少女が現れた。

腰まである金髪をいくつかの房に分けて、房の先を赤いリボンで結んでいる。赤紫色の瞳はどこか眠たそうで、紫色のドレスを纏っていた。

彼女の名前は八雲紫。この『幻想郷』の賢者にして管理者だ。

幽香は彼女に食ってかかった。

「返しなさい！」

「なにを？」

「惚けるんじゃないわよ、人間の子どもよ！ 里で居なくなつたつて騒ぎが出る。どうせアンタが隠したんでしよう!？」

この少女は『境界を操る』能力を宿している。空間に裂け目を造り、その中に落としこまうなど造作もない。

きつとこの女があの子を隠したに違いない。幽香はそう考えたのだが、当の紫は疑問符を浮かべていた。

「アナタ、何を言っているの？」

「良いから早く返しなさい！」

「私、この時期は暑いから動きたくないのよね。だから、仕事は専ら藍にやらせてるから、そんなこと知らないわ」

ふああ、と欠伸をしながら紫はそう言った。その態度が気に食わず、幽香は地面を踏

みならした。

「良い加減にしなさい！」

「その言葉、アナタにそっくりそのまま返してあげるわ。人がせつかく気持ち良く寝ていたのに叩き起こされたのだから……。それに言い掛かりは止してちょうだい」

伸びをしなから言う紫に幽香は激しい怒りを覚える。

「アナタがそう怒るのは珍しいわね。なあに、花でも押し折られたの？」

「……」

怒りは飛び越えると静かになるらしい。幽香は静かな殺気を放った。辺りに居た鳥がぎゃあぎゃあ言いながら飛び立つ。

「……私は何も知らないわ」

流石にまずいと思ったのだろう、紫はそう言った。

「ウソをつくんじゃないわよ」

「本当よ。人里で人が消えた？ それでなんで私が犯人扱いされなくちゃいけないのかしら？」

「アンタの能力で——」

「私は『外』から『内』に招き入れるだけよ。なんで筋肉を骨の中に入れなくちゃいけないのかしら？」

紫の言い回しはとても分かりにくい。どこか斜に構えた口調の所為だからかもしれないが、彼女は「内側のモノをさらに内側に入れる意味が分からない」と言っているのだろう。彼女の言う『外』は『現世』であり、『内』は『幻想郷』のことだろう。『幻想郷』に居る人間を神隠しする意味は無い。

「アンタじゃないなら誰なのよ」

「知らないわよ。他の妖怪なんじゃないの？」

紫はぞんざいに言い放つ。

幽香はそこでハツとした。確か、てゐは「ここら辺で性質の悪い妖怪が出た」と言い、文は「ヤンチャしてる山の妖怪が居る」と言っていた。

だとしたら。

「邪魔したわね」

「アナタの尊大な態度に物申したいところだけど、見逃してあげるわ」

紫はそのまま消えた。

幽香は足に力を入れると飛び立った。そしてそのまま妖怪の山へと向かった。

妖怪の山の上空に滞空し、見下ろす。

「どハ……どハ……っ!？」

焦りが幽香の視野を狭める。視線は忙しなく少女らしき人影を探していた。太陽に

近い所為か、熱波が強い。じりじりと肌を焦がし、体の水分を奪って行く。

「どこなの、一体どこに居るの……っ!？」

きよろきよろとあたりを見渡す。

ふと、沢のあたりで騒がしい一団を見つけた。遠目だからはっきり分からないが、河童らしき妖怪が大きな妖怪と戦っていた。

「相撲でもしてるの? でも……」

とりあえず、今は情報がほしい。幽香はそこへ降りることにした。

「なにしてるの」

「っ」

河童たちは「助かった」と言う表情を浮かべ、大きな妖怪は「ちっ」と舌打ちをする。と森の中へ逃げて行った。

幽香はなんの妖怪かは分からなかったが、取りあえずその妖怪を覚えておくことにした。

「河童たち、聞きたいことがあるんだけど……」

「そっだよ! アナタ、この娘の知り合いだらう!？」

そう言って傷だらけのにとりは隠していた、守っていた物を見せる。

そこには血だらけの少女が横たわっていた。

幽香の、身体から、何かが、消えて行く。

「私が来た時にはすでにこうなっていた。さっきの妖怪が止めを刺そうとしてたから、水をぶつけてこっちに気を逸らしたけど……仲間も呼んで、どうにか守りきったよ」

傷らだけの河童たちはへなへなと崩れ落ち、その場に尻餅をついていた。

「なんでこんな所に人間の娘がいるのか分からない。何か理由があるのかもしれないけど……。山の妖怪が悪さをしてるって、烏天狗は紙をばら撒いてたはずなんだけど……」

「あ、あ、あ……」

幽香の耳に、にとりの説明は届いていなかった。

幽香の絶叫が山に響き渡る。あまりの大音声に、にとりたち河童は耳を塞いでいた。

「あややややつ、何の騒ぎですか!？」

「どうしたんですか!？」

幽香の絶叫を聞きつけ、文と早苗がやってきた。

「わ、わかんないっ! でも、アイツがあの人間の子を見たら急に……っ」

文も早苗も、血だらけの少女を見て瞠目した。この二人も、その少女には見覚えがあつたのだ。

「まさか、あの時の人間の娘ですか……!？」

「ウソ、なんで……!？」

文も早苗もなぜこんなことになっているのか分からない。幽香はふらふらとした足取りで少女に近づく。そして自分の服が汚れるのも厭わず、血の海に伏した少女を抱きあげる。

「なんで、なんで……ッ!？」

少女を抱きしめると、僅かに拍動を感じ取った。

「……お、——……ちゃん……?」

少女が僅かに口を動かす。何を言ったかまでは聞き取れなかったが、少女は奇跡的に言葉を発していた。

(まだ、生きてる……ッ！)

幽香は立ち上がると、少女を抱きしめた。

「ちよつとアナタ、どこに行くつもりですか!？」

「うるさい！ 黙ってて！」

あまりの剣幕に文は出しかけていた手を引つ込めた。

「この子はまだ生きてる。だったら、永遠亭に連れて行って月の医者に診せる！」

文はハツとした。

「それならば私の方が適任です！ 私は『幻想郷』最速なんですから！」

そう言って文は幽香から少女を取ろうとしたが、幽香はその手を払った。

「なんで邪魔をするんですか!？ 時は一刻を争うんですよ!？」

文は大声をあげながら幽香ににじり寄る。

そして幽香は奪われないように、取られないように守りながら叫んだ。

「この子は私が連れて行くッ!!」

文は、早苗は、にとりたち河童は。

不意に、自分の子どもを守ろうとする野生の生き物を連想した。

自然界の動物は自分の子が傷付くと親が守ろうとする。近寄って来る敵には容赦することは無い。母は強し、なんて言葉があるように、自分の子どもを守ろうとする母親は、強い。

文は「そうですか」と言つて退いた。

「ならば私は随伴させてもらいます。私の風に加護をこの子に！」

それならばいいだろう、と幽香は頷いた。

幽香と早苗は空を飛び永遠亭を目指す。

太陽の『暑さ』など気にならない。

それよりも『熱い』何かが、幽香の身体を駆け巡っていた。

永遠亭に着くと、てゐるが「うわっ」と驚いていた。

「なんだいなんだいいきなり——つて、なんだそりやあ!？」

血だらけの少女を見てゐるは目を丸くしていた。

「てゐさん、八意先生は!？」

「ちよ、ちよつと待つてな!」

「待つワケ無いでしょう、このバカ!」

時は一刻を争うのだ。そんな悠長なことは言つていられない。

幽香は戸を蹴破り、土足のまま廊下を走る。

診察室らしき部屋に幽香は乱暴に入る。

「ちよつと何よ騒々しい——」

診察をしていたらしい永琳は眉をひそめていたが、幽香が血まみれの少女を抱きしめているのを見ると言葉を失っていた。

「お願い、この子を……この子を……ッ」

幽香が「お願い」と言う所を、誰もが初めて聞いた。しかし、逼迫した様子の幽香はそんなことにかまかけて居られない。

「この子を助けてッ!!」

泣きそうな表情を浮かべ、幽香は叫んだ。永琳は診察していた患者に「急患が入りましたので」と言つて立ち上がった。

「てゐる！ ウドンゲを呼んで来て！」

「鈴仙は里の方に薬を渡しに出払つてる！ 今ウサギを使いに出したけど、戻つて来るにはまだ時間がかかる！」

ちつ、と永琳は舌打ちをした。

「私に何か手伝えることはありませんか!?!」

早苗は自分の胸に手を当てながら問いかける。永琳は何か言おうとしたが、一瞬だけ口を噤むと頷いた。

「てゐる、守矢の巫女、一緒に来て」

「はいっ」

「お嬢ちゃん、貸して」

幽香は渡す事を拒もうとしたが、ここでぐずつてはダメだと思い、少女を永琳に手渡した。

「行くわよ」

永琳はてると早苗を連れて廊下に出た。

「輝夜、力を貸して！」

なぜそこで輝夜の力が必要になるのか分からないが、永琳がそう言うのだ。何か考えがあるのだろうか。

「わ、私に何かできることは……っ!?!」

憔悴した様子の子の幽香が問いかけるも、永琳は小さく首を横に振った。

「アナタは十分役目を果たした。だから、今は休んでて」

「……」

遠回しの戦力外通告に、幽香は言葉を発することが出来なかった。

去っていく永琳たちを見送り、幽香はダンツ!! と机を叩いた。あまりの衝撃に机が真つ二つになってしまい、イスに座っていた患者は「ひいつ!?!」と悲鳴をあげて腰を抜かしていた。

「……ッ」

強いだけでは何もできない。

幽香は初めて、自分の『弱さ』を呪った。

永遠の時間とはこういうことを言うのかも知れない。

永琳が手術を初めて相当の時間が掛かっている。使いのウサギが鈴仙を連れてきて、鈴仙は息切れをしながらも手術室へと入って行った。

ただ時間だけが過ぎて行き、幽香は何度も少女が入って行った部屋を見ていた。

日もとつぷりと暮れ、夕暮れの帳が降りはじめていた。

ガラツ、と扉が開いた。

「ツ」

幽香は顔をあげてそちらを見た。そこには浮かない顔をした永琳たちの姿があった。

「……助かったの？」

「「……」」

誰も何も言わない。

「助かったの？」

誰も何も言わない。

「助かったのツ!？」

誰も、何も言わない。

「……まさか」

想定しうる最悪の想像を問いかけた。

「死んだ……の?」

永琳は何も言わず睨を下ろした。

幽香は永琳の胸倉を掴むとダンツ!! と壁に叩きつけた。いきなりの行動に他の四

人は目を丸くしていた。

「どうして……ッ」

幽香の頬を、伝う何かがあった。

「どうして助けてくれなかったのよッツ!？」

それは止め処も無く溢れ、幽香の頬を濡らしていく。

「アンタは医者でしょ!?! あの月からやってきた、天才なんだろう!?! 私みたいな妖怪じゃ手も足も出ないくらい、頭がキレるんでしょう!?! その頭で、作った薬で!! 多く

の人間を救ってきたんでしよう!?　なのに、なのになんで……ッ!」

幽香は、叫んだ。

「なんであの子を救えなかったのよおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ
!」

その叫びに、早苗は大粒の涙を零した。

その叫びに、鈴仙は悔しそうな顔を背けた。

その叫びに、てるは静かに目を閉じた。

その叫びに、輝夜は読めない表情で耳を傾けていた。

「なんでなのよ!」　なんであの子がこんな目に遭わなくちやならないのよ!　あの子は
まだ九つなのよ!　明日、一〇になる誕生日を迎えるはずだったのに……ッ!　どうし
てなのよ!　答えなさい、永遠亭の医者!!」

ポロポロと涙をこぼしながら幽香は問い詰める。永琳は努めて冷静に口を動かした。

「保つても明日までの命。遅いか早いかの違いよ」

「ガッ! と永琳の顔面に拳を叩きこむ。」

「そんなことはどうでも良いわよ!! アンタは何でも治せる医者なんでしょう!?!」

「私は何でもは治せないわ。病氣や怪我なら治せるけど」

「じゃあ治しなさいよ!?!」

「ゴッ! ともう一度拳を叩きこんだ。」

「……言つたはずよ。あの娘は自分で血を造れない」

「だから何よ!?!」

「手術を知らないアナタに教えてあげるけど——」

永琳はいつもの口調で告げる。

「手術にはあの娘に合う型の血液が必要なの」

「それが一体どうしたと言うのだろうか。以前来た時、輸血とか言うヤツをしていたじゃないか。」

「アレはあの子自身の血。血が造れないと言つたけど、全くと言うワケでは無い。微々たる量の血を抜き取って、いざという時の為に備えていたの。とても手術を賄えるほどの量は採れないわ」

「分らない? と視線で訴えて来る。」

「血が足りないよ、あの娘に手術なんて出来ないのよ」

それじゃあ、一体、何のために、少女を幽香から取り上げたと言うのだろうか。
期待させておいて結果は最悪。

「……なんなのよ、もう……」

幽香の声からは怒りすら消えていた。

「あの子は何で、死ななくちゃいけなかったのよ……。あの子が何をしたらって言うのよ……。」

縫るように、幽香は言った。

「あの子を、返してよ……ッ!？」

その姿は。

我が子の死を受け止める事の出来ない。

『母親』のようだった。

永琳は何も答えず、瞼を下ろすだけだった。

「幽、香さん……」

涙を流しながら早苗が近づいてきた。

「あの子がなんで……あんな、妖怪が出て来るところに居たか……分かりますか？」
そんなの、分かるワケが無い。

「……あの子、これを、握っていたんです」

そう言つて早苗が差し出してきたのはいくつかの植物——とある花だった。

「……!?!」

幽香はそれを見て絶句した。

「……これ、何て言う花なんですか? とても綺麗で……」

「どれだけ私を振り回せば気が済むのよ!?　どれだけ私に心配をかけるのよ!?　大人の言うことをちゃんと聞きなさいよッ!!」

今となつては叱る相手が居ない。それは幽香の、ただの独り言だ。

「やつと花の芽が出たじゃない!　やつと宿題が出来るじゃない!　アンタ、あれだけ楽しみにしてたじゃない!　花を育てる約束をしたじゃない!　道具だつて持つて来たのよ!?!　なのはどうして……っ!?!」

幽香は胸に抱き寄せたそれらを見遣つた。

忍冬——花言葉は『愛の絆』

酸葉——花言葉は『親愛の情』

銭葵——花言葉は『母の愛』

どれもこれも、『愛』に満ちた花たちだ。

「バカじゃないの!?!」

幽香の叫びが永遠亭に響き渡る。幽香はうずくまり、泣き喚いた。

その姿は誰がどう見ても、『母親』のそれだった。

幽香は今になって理解した。

あの時に——星々に問いかけた時の答えを、理解した。

風見幽香という妖怪は、人間の娘に情を移し。

我が子のように、愛していたのだ。

初めての喪失感
は幽香を苛ませた。

流石の永琳も、これを治す手段は分からない。

なぜなら。

永遠に生きる薬を作ること
は出来ても。

愛の病を治せる薬など、
作れないのだから。

「……」

幽香は虚ろな目で三つの植物を見つめていた。そんな姿は見ていて痛々しい。

「……正直なところ、意外だったわ」

壁に背を預け、腕を組みながら幽香を見ていた永琳が呟く。

「アナタがこんなにも、愛情深い妖怪だとは思ってもみなかった」

「……」

「アナタが過度に人間を見下すのは、そう言う本能を隠そうと言う、自己防衛が働いているのかもしれないわね」

幽香はちらりと永琳を見たが、すぐに花々に視線を戻した。あの子の遺品となった花を、いつまでも見つめる。

「だからこそ謝るわ。ごめんなさいね」

永琳は一体、何に謝っているのだろうか。側に居た鈴仙までもが申し訳なさそうにしている。

「私はアナタに細工をしたの」

「……」

「覚えている？ アナタ、ウドンゲと目を合わせたと思うのだけれど」

覚えていると言えば覚えている。永琳と何か内緒話をしている時と、土足で廊下を歩いた時に、幽香は鈴仙と目を合わせていた。

「……私の『狂気を操る』能力は、目を合わせることで効果を発揮します」

彼女の瞳が僅かに発光する。

「私の『狂気の瞳』に魅入られた者は例外なく、効果を発現させます」

彼女の能力はを簡単に説明するなら『波長を操作する』だ。怒っている人間に静かな波長をぶつけることで怒りを鎮め、泣いている人間に楽しい波長をぶつけることで泣きやませる。それとは反対の波長をぶつけることで対消滅を起こし、元の波長を無かったことにする能力だ。

「私はウドンゲに頼んで、アナタに術をかけたの。人間に対する壁を取り払う術を」

鈴仙は幽香の『人に対する壁』の波長に、反対のベクトルの波長をぶつけることでそれを無くしたのだ。

だからか。と幽香は納得していた。

この自分があつさりや情に絆された理由は、鈴仙の能力によるモノだったのだ。

「勘違いをしないでください」

鈴仙は否定するように言う。

「確かに私はアナタに術をかけました。しかしそれは、あくまで壁を取り払うだけ。それから先の感情は、アナタのモノです」

アナタの偽りの無いモノです。鈴仙はそう言った。

「本来愛情深いアナタは、あの子と関わることで『深い愛情』を知ってしまった。だから、アナタは今もこうして途方に暮れている。アナタを捻じ曲げてしまった。少しでも人間に対して友好的な態度になれば良いと思っていた、浅はかな私の所為よ」

「お師匠様の所為じゃないです。それを咎めなかった弟子の私の所為です」

「……どうでも、いいわよ」

掠れた声が永琳と鈴仙の耳朵を打つ。

「どちらにせよ、あの子は明後日には死んでいた……。アンタの言う通り、遅いか早いかの違いだけ……。滑稽ね、私……」

じわり、と目尻に涙が浮かぶ。

「何がどうあれ、もう少しあの子に優しくしてあげればよかった。けちけちせず、沢山の花をあげればよかった。もつともつと、遊んであげればよかった。もつともつと」

愛してあげればよかった。

一滴の涙が頬を伝う。

「でも、でもせめて……。せめて……。一〇歳に……。してあげたかった……。ッ！ だって、そ

うでしょう!？」

幽香は顔をあげて叫んだ。

「あの子の今の母親は私なんだから!!」

幽香は、認めた。

少女の母親は自分であると、人間の、他種族の、自分よりも遥かに幼い子どもの、母であることを。

「似てたとか似てないとか、そんなんじゃない! あの子が母親だと思ったら、私はあの子の母親なのよ! 自分がそうだと思うたら、私はあの子の母親なのよ! 自分の子どもを愛して何が悪いの!？」

少女と幽香の間に血のつながりなどない。出会ってたったの四日しか経っていないが、時間など些細な問題だ。

問題は、当人同士がどう思っているか。それだけで幽香は『母親』になれるのだ。

「自分の胎を痛めて産んだワケでも、赤子の時から育てたワケでもないけど……。それ

でも、あの子は私の、子どもなのよ……」

少女が取ってきた花たちは、それぞれが親子に関係する、もしくはそれに準ずる関係の意味の花言葉を持っている。少女は幽香のことを母親だと認めていたのだ。

幽香が意地を張って認めなかったが為に、最悪の結末を迎えてしまった。

「ただの一度も、抱き締めてあげられなかった。ただの一度も、名前を呼んであげられなかった……」

幽香はそれを後悔していた。母親であるならば、名前を呼ぶくらい普通のことなのに。

永琳と鈴仙は静かに目を閉じていた。

そこへ

「お邪魔しますよ」

「おいつす」

入ってきたのは文にとりだった。

「話は先ほど守矢の巫女から聞かせてもらいました。……なんて言えば良いか分かりませんが、幽香さん……」

「……記事にしたければすれば良いわ。こんな滑稽な私……もう二度と見れないわよ」
ふざけないでください。思いの外、文の声は真剣だった。

「私のモットーは『清く正しく』です。絶望を味わっているアナタを記事にするほど、私は落ちぶれちゃいません。そしてアナタに、一つ情報を渡したいと思います。口ハで結構です」

「おい天狗、本気なのか？」

文はゴソゴソと何かを探っている。にとりは文の正気を疑うかのような声色だった。

「これを」

文はそう言つて一枚の写真を手渡してきた。

「そこに写っているのは、仇です」

幽香は大きく目を見開き、その写真を引つ手繰った。

そこに写されているのは幽香の身長のは倍はありそうで、横幅もそれなりで、体重に至つては倍じゃ利かなさそうな巨漢の妖怪だった。その妖怪に、幽香は見覚えがあった。

「……あの時の、妖怪……ッ」

にとりたちが必死に戦っていた。少女の命を奪った。

憎むべき仇敵。

先ほどまでは死人のような目だった幽香だが、その瞳にはギラついた『何か』が灯つていた。

「河童たちから聞いた風貌と、この河童を連れて確認しました。間違いなく、その妖怪だ
そうです」

「……」

幽香は穴が開くほど写真を睨みつけた。

「他にも山の妖怪や人間たちにも聞いて回ると、少しヤンチャが過ぎる件がちらほら出てきましてね。里の人間の証言によると、数年前に里の人間を襲い、とある女性が喰い殺されたそうです」

ドクンツ、と幽香の心臓が強く鳴った。

その話は聞いたことがある。あの老いぼれが、言っていた。

「……」

この妖怪は。

あの少女だけではなく。

その実の母親をも、殺していたのだ。

グシャツ、と写真を握りつぶす。

「「……」」

その場に居た誰もが言葉を発することが出来なかった。
なぜなら。

気を抜いたら幽香の放つ殺気で気絶しそうだったのだ。

あの永琳までもがそう思うくらいだったのだから、今の幽香はこの場の誰よりも強いのだろう。

幽香から放たれている殺気は尋常じゃなく、キシキシと床や壁、天井までをも軋ませるほどのものだった。

「……私は山の妖怪に対する裁判権を持っています」

そんな中、文は喉に強い渴きを覚えながら声をだした。心なしか、声がかすれている様な気がする。

「私はその裁判権を今回限り……アナタに譲渡したいと思っています」

幽香はゆつくりと、文へ視線を向けた。

血走った憎しみ一色の瞳に射抜かれ、文はごくりと粘ついた唾液を嚙下した。

「……アナタはこれから、どうしますか？」

「……それは、質問のつもり？」

ゾワリツ、と文の背筋は凍りつく。にとりにはガクガクと身体を震わせ、鈴仙は永琳の陰に隠れていた。永琳の額には一筋の汗が流れていた。

「……そう言えば、アンタのこの姫と風祝と小さいウサギはどこにいるの？」

今になってこの場に居ない三人を思い出す。その質問に答えたのは永琳だった。

「少し頼みごとをしてしているわ。上手くいけば全てをひっくりかえせる」

永琳が何を企んでいるかは知らない。興味も無い。

幽香はゆらりと立ち上がった。そしてそのまま文の前まで歩むと、グシヤグシヤになった写真を見せながら問いかけた。

「……こいつが居る場所、分かる？」

「え、ええ……」

「……案内しなさい」

有無を言わせない、強烈な圧力を浴びせる。文はただ頷くことしか出来なかった。

「……行くわよ」

幽香は静かな口調でそう言った。幽香が歩くと自然と道が作られた。その道を歩き、

幽香は玄関を指す。

「復讐なんてやめておきなさい」

そう釘を刺したのは永琳だ。

「……」

幽香は非常に緩慢な動きで振り返った。

『憎しみ』に囚われた復讐はなにも生まないわよ。私は大昔から続き、今も終わらない

悲劇を見ているわ」

「……………はっ」

幽香は鼻で笑った。

「……………復讐？ ……そんな大それたものじゃないわ」

幽香は正面を向き、恐ろしいまでの声色で言った。

「これは我が子を殺された『母親』の、ささやかな仕返しよ」

第五話

文に案内させ、幽香は妖怪の山を歩いていった。一步一步歩きたびに、森の動物たちがざわめきだす。

「……ねえ、天狗」

呼びかけると、先導していた文は肩をすくませながら振り返った。

「は、はいっ、なんでげすか!？」

緊張や恐怖からか、口調が乱れていた。

「……アナタには裁判権があると言っていたけど……。……それはどれほどのものなのかしら?」

「と、言いますと?」

「……勢い余って殺しちゃって、カスも残らなかつた場合、どうなるの?」

ごくり、と文は唾を飲み込んだ。心なしか震えているように思える。

「ま、まあ、ケースバイケースと言いますか、これも私の一存による裁判の一つなので……。アナタが責められることはないでしょうはい」

「……被害の規模は、どこまでかしら?」

「うええっ!? さ、流石に山を消し飛ばすとか勘弁して下さいよ!」 始末書どころの騒ぎじゃないです、異変扱いされて私が博麗の巫女に退治されちゃいますよ!」

だったら消し飛ばさない範囲なら良いか、と幽香は解釈した。自分を押さえられるかどうか分からないが、まあそうなったらそうなっただ。

「随分とおつかないこと聞きますね……。それを聞いたらなんだか胃のあたりがキリキリしてきましたよ」

「……胃痛に効果のある花を煎じたものでも教えましょうか? ……まあ、胃の中のモノを全部戻すくらい苦いけど」

「それ意味無くないですか!？」

良薬は口に苦しという。しかし、今から行う行動が、あの妖怪の『良薬』になるかどうかは分からないが。

しばらく歩いていると、文が「ここです」と言っただち止った。

「二応、私は空から監視させてもらいます。何かあったら博麗の巫女を呼びに行かなくてはいけないので」

言外に忠告をしているのだろう。それくらいは分かっているつもりだ。

「……ええ」

「……それでは」

文はそう言つて翼をはためかせ、飛び立った。

森の中は月明かりが届かず、薄暗い。そして不気味なほどに山は静まり返っている。そのまま歩を進めるともぞりと動く影があつた。

「……誰だ、オレの眠りを邪魔するヤツは」

ドシ、ドシ、と足音を響かせながらその妖怪は振り返つた。そして自分よりも小さな幽香を見つけると僅かに驚いたが下衆な笑みを浮かべていた。

「ほう……。山菜でも採りに来て道に迷つたのか？ こんな妖怪だらけの山に来るなんて、余程のバカなんだろうな」

「……」

耳障りな声が幽香の鼓膜を揺らす。それだけで幽香の内側から激情はふつつつと込み上げて来る。

「そう言えば……。だいぶ前に人間の小娘が沢に来て何かしてたな」

ギリツ、と日傘を握る力が強くなる。

「人間なんて弱いだけで醜い……。まあ、仕方ないだろうな」

妖怪は心底小馬鹿にしたような笑い声をあげながら

「所詮はオレたち妖怪のエサでしかないんだからな」

そう、言つた。

「……」

幽香から感情の全てが消えた。女性の歩幅で幽香は、その妖怪に近づく。

「この前の娘は惜しかったな……。まだ若えが、それなりに食い応えのありそうな感じだったんだが……。あの時、河童が邪魔しなければすぐに食えたんだがな」

妖怪は惜しむように言い、舌舐めずりをした。

「そう言えば、あの人間……。なんか言ってたな」

妖怪はアゴに手を当てながら思い出そうとしていた。うんうん唸っていると、「ああ、そうだそうだ」と手を叩いた。

「おかあちゃんにお花をあげるの、だったっけ」

トン、と軽い音が聞こえた。数秒後には何か巨大なモノが落ちる音と、「ぎいあああああああああああああああああああああああッ!?」という絶叫が森を揺らした。

「ぐ……。うあ……。ああアアああアあ……。ッ」

妖怪は苦悶の表情を浮かべながら幽香を睨みつけた。

「てめえ……ッ。よくも、良くもオレの腕を……ッ」

体中からは汗を。右肩からは血を噴き出しながら妖怪は叫んだ。

「……腕が一本なくなつたくらいでぎゃあぎゃあ五月蠅いわよ」

日傘の先に光が集まる。そして幽香は落ちていた肉塊に標準を合わせると光線を放つた。ジュツ、と肉が焼ける音と焦げ臭い二オイが辺りに充満する。

「……あら、焼き過ぎちやつたかしら。これじゃあ犬も食わないわね」

日傘を叩きつけると、炭化した腕だったモノは容易に砕け散つた。パラパラと辺りに炭を巻き散らかし、それは消えた。

「許さねえ！ てめえは絶対に許さねえ！ 生きてまま内臓引きずり出して妖怪の巣窟に放置してやる！ 殺す一步手前でボコボコにして木のてっぺんに括りつけてやる！」

それはいつぞや幽香が言ったセリフに似ていた。

ブチブチブチイ、と筋肉の繊維が切れる音が聞こえそうなほど、幽香は壮絶な笑みを浮かべた。幽香の目からはハイライトが消え、不自然なほどに瞳孔が大きく広がっていた。髪の毛の数本が口に入っていたが、そんなことはどうでもよかった。カクン、と首が傾いた。

「……許さない？ ……格下のクセに、大きく出たものね。……さっきの右腕みたいに

カウンターの要領で幽香の拳が妖怪の顔面に叩きこまれる。ゴキゴキゴキイツと骨の碎ける感覚が幽香の腕を伝って来た。

「げばあつ!?!」

鼻の骨が折れたらしい。鷲鼻は左に折れ曲がり、両方の鼻の穴からはダラダラと血が流れ出ていた。妖怪はもんどりうって木に激突する。しかし、激突の衝撃が強かつたせいか、大木は根元から圧し折れてしまった。

ズズン……と倒木の音が鈍く森にこだました。妖怪は「痛てえ……痛てえよ……」と言いながら鼻を押さえていた。

ザリツ、と靴が地面を舐める音が聞こえ妖怪は肩をすくませた。視線の先には左右に揺れながら近づいて来る幽香の姿があった。

「……ッ。オレがてめえに何したって言うんだよ!?!」

妖怪の鼻声が辺りに響く。

「てめえ、山の妖怪じゃねえな!?! 余所モンが勝手なことしてんじやねえぞ!?! お前がいくら強かろうと、山での勝手は許されねえ! このことが天狗どもにバレたら、お前は袋叩きだぞッ!」

妖怪の山のヒエラルキーの上位に存在する天狗。自分の縄張りで、そこに住まう者が攻撃されたとなれば襲撃者を肅正するだろう、と妖怪は判断したのだ。

「はは、はははははっ！ そうだよ、なにをビビってんだオレは！」

「……本当に、無知で救いようのない憐れな虫けらね。……私がその程度で怯むと思っ
ているのかしら？ ……そもそも、その天狗から許可を貰っているのよ、私？」

「う、嘘ついてんじやねえよ！ そんなこと、あるわけ——」

「……だったら、これだけ派手にドンパチやってるのに、なぜ一向に天狗はやって来ない
のかしら？」

幽香がそう言うと、妖怪の顔が青ざめて行く。

「……マジ、なのかよ……」

天狗からの庇護のない妖怪など、恐るるに足りない。庇護があつたとしても、天狗に
後れをとることはないが。

幽香はゆらりと妖怪に近づく。妖怪は恐怖で足がすくんでしまったのか、その場でじ
たばたするだけだった。

「お、おいお前……オレを殺すつもりなのか……？」

答えない。

「オレが何したつて言うんだよ!?! 人間を襲つただけじゃねえか!?! お前だつて妖怪な
ら人を襲つたことくらいあるだろう!?!」

答えない。

「妖怪が人間を襲う！　これがここでのルールのハズだ！　それを守っただけなのに、なんで殺されなくちやならねえんだよ!？」

妖怪を間近で見下ろす距離まで近寄ると、日傘を閉じ、鋭利な先を妖怪に向ける。

「なんでだよ……なんでだよ!？」

妖怪は目に涙を浮かべながら叫んだ。

「別に人間なんて殺したって構わないだろう!？」

決定的だった。

この妖怪は自分が行った罪深さをまるで理解していない。どれだけの大罪を犯したのかも、分かっていない。

こんな虫よりも役に立たない妖怪など、滅ぼしても誰も文句を言わないだろう。

「死ね、虫けらが」

日傘を持つ手を限界まで引き、妖怪の心臓を目がけて突き出した。

——どんな小さな虫もいっしょーけんめー生きてるんだから殺しちやダメって

少女が、そこに、見えた。

ビタアツ!! と日傘は妖怪の皮膚に触れる直前に止まった。

妖怪はガタガタ震えながら不思議そうに幽香を見上げていた。対する幽香も、ガタガタと震えていた。

殺したいのに殺せない。そんな葛藤に苛まされているように見えた。

「……なんで、止めた?」

妖怪が問いかけると、幽香は「はっ」と鼻で笑った。

「……止めたんじゃないわ。……止められたのよ」

妖怪は怪訝な表情を浮かべていた。

「……私はアンタを殺したくてたまらない。……この胸に宿る『憎しみ』を晴らすには……。仇であるアンタを殺すほかない。……それで復讐は終わる。……そのハズなの

に……。……アンタは生きる価値も無い虫けら同然の存在なのに。……私の大切なモノを奪った、憎むべき相手なのに」

ギリツ、と奥歯を噛み、幽香は眉をハの字にしながら言った。

「それでも、アンタにだって『命』があるんだもの……ッ」

どんな小さな虫もいっしょーけんめー生きてるんだから殺しちやダメって。

少女の言葉が幽香を留まらせた。『憎しみ』に囚われていた幽香の手を引っ張って、立ち止まらせた。

幽香はあの少女に教えられたのだ。

「アンタはあの子を殺した。その事実は変わらない。でも……。アンタを殺したところで、あの子は、もう、戻って来ない……っ」

あの太陽よりも眩しい笑みは。愛くるしい笑みは。

なによりも。

幽香の愛した少女は、生き返らない。

失った命は、蘇らない。

「失ったモノは返って来ない……ッ。アンタを殺しても、あの子は返って来ないッ!!」

ダンッ!! と地面を踏みならすと、そこから蜘蛛の巣のように地面にヒビが入った。

「例えば妖怪が人間を襲うのがこのルールだとしても! それで妖怪の本来あるべき姿だったとしても! でも! それでも!」

幽香の瞳から、温かな雫がこぼれた。

「あの子を殺していい理由にはならないのよッッ!!」

この夏を通して。四日と言う短い期間だったが、幽香は学んだのだ。

『愛』を。『命』を。

そして『本当の愛情』を。

少女がいたからこそ幽香は『憎しみ』に囚われなかった。少女は幽香に『愛』の素晴らしさを、『命』の尊さを、教えてくれたのだ。

その小さな命が、幽香を導いたのだ。

『憎しみ』の先にある『本当の愛情』に、辿り着かせてくれたのだ。

ああ、世界はこんなにも残酷で、冷酷だ。大切なモノを奪われる理不尽や、それによって苛まされる不条理に満ち溢れている。

しかし。

『本当の愛情』を知ったからこそ。『憎しみ』という枷を外したからこそ。

幽香は、少女が愛した世界を、少女がいた世界を、少女と過ごした世界を。

守りたかったのだ。ほかならぬ、幽香の手で。

母を喪った少女は少なからず、母を殺したコイツを憎んだかもしれない。しかし少女はそれをおくびにも出さなかった。母の居ない世界を、受け入れていた。幼くして『本当の愛情』に辿り着いていたのだ。

『本当の愛情』とは、どんな理不尽に晒されても、どんな不条理に飲み込まれても。耐えがたい絶望を体験したとしても。心を引き裂かれる程の凄惨な痛みを味わったとしても。

それら全てを受け入れ、その世界を愛そうという気持ちなのだ。

幽香は少女と同じ真理に至ったのかもしれない。

愛する存在を喪った時こそ、その者の『本当の愛情』が試されるのだ。

守りたかったのだ。ほかならぬ、幽香の手で。

母が子の世界を守って、何が悪いのだろうか。

「私はアンタを絶対に許さない。他の妖怪がアンタの行動を『当たり前のことだ』と言つても、私は断じて認めない。報復しに来なければ来るがいいわ。その時は、容赦しない」
溢れんばかりの殺気を妖怪に浴びせる。妖怪は歯の根が合わないのか、カチカチと鳴らしながら震えていた。

「右腕と鼻のことは謝らないわよ。腕一本と鼻でチャラにしてあげるって言ってるんだから、泣いて悦びなさい。本当ならズタボロにして、全身の骨を一本も残らず粉碎して、生皮を全部剥ぎ取って、汚い火花として扱おうとしたんだけど……その程度で済んだんだもの。安い買い物でしょう？」

幽香は震える妖怪の頭を掴み、自分の顔に近づけさせた。
「私の目が黒い内は、里の人間に手を出すんじゃないわよ」

幽香の瞳の色は赤銅色だが、誰もその事にツツコむ者は居なかった。妖怪はボロボロと涙をこぼし、震える声で「わ、分かりました」と言った。

「誓える？」

「ち、誓います……。お、オレはもう……。里の人間には、手を、出さない……」
「もし万が一、破ったとしたら……。そうね」

幽香は悪魔のような、サデイストのような笑みを浮かべて問いかけた。

「生きたまま内臓を引きずり出されて放置されるのと、死ぬ一歩手前までボコボコにして木の天辺に縛り付けるの……。どちらがお好みかしら？」

全てが終わりに、幽香は空を飛びながら永遠亭へ向かっていた。

「私としては禿山になることを覚悟してたんですけどねえ」

文はそう言いながら幽香の隣を飛んでいた。

「どういうことよ」

「いやあ、だつてあれだけ病んでたんですよ？ 原型が分からないくらいもうボッコボッコのタコ殴りにするとか、切断した自分の肉体を自分自身に食わせるとか、ワザと急所を外してねちねちと攻撃するとか……拷問をするのかと思つたんですけどね」

「あら、そういう方法もあつたわね」

やぶ蛇だつた!?! と文は戦慄していた。

「例えアンタが言つた方法が思いついても、結局は殺せなかつたでしょうね」

どんな小さな虫もいっしょーけんめー生きてるんだから殺しちやダメって。

あの子は母親にそう言われて育つて来た。だとしたら、母親である自分がその言葉に反することをしてはいけないだろう。

その言葉を忘れない限り、幽香は無駄な殺生は出来ないだろう。元より、するつもりはないのだが。

「変わるもんですねえ」

文はしみじみと呟いた。

「どうしたのよ、いきなり」

「いえ、人は……妖怪はこうも変わるものだと思います。価値観の違う存在と触れ合うと、その人の思考にもある程度の変容がもたらされるんですね」

かつての幽香は人間を見下していた。かつての幽香は人間を守るだなんて考えてもいなかった。

たった一人の少女と出会ったことで、幽香のアイデンティティは大きく変わったと言えるだろう。

「これを機に、アナタも心変わりしますか？」

「バカ言うんじゃないわよ」

幽香はため息をつきながら言った。

二人が永遠亭に辿り着くと、永琳と鈴仙が迎えてくれた。心なしか、二人の表情に暗い色は無い。

「おかえり」

永琳がそう言って来るが、幽香は「ふん」と鼻を鳴らすだけだった。

「……その様子から判断するに、一線は越えなかったみたいね」

「案外、殺してスッキリしてるかもしれないわよ？」

「それは無いわね。だってアナタ、とても穏やかだもの」

「……」

永琳は疑いもせずそう断言した。なんとなく悔しい。

「復讐を果たした人間は、得てして喪失感を漂わせるわ。目的を達成してしまったから、どうしていいのかわからずに呆然とするの。でも、アナタはその様子がない。……乗り越えた、と言っているのかしら？」

永琳は穏やかな声色で訊ねてきた。

「……ふん」

と、幽香は鼻を鳴らすだけだった。

「波長を見る限りでは安定しています。この調子なら問題ないでしょう」

鈴仙は波長を見る能力者だ。永琳は「そう」と言つて頷いた。

幽香は思い出したことがあり、鈴仙に視線を向けた。

「ねえ、大きいウサギ」

「私には鈴仙・優曇華院・イナバと言う名前があるのですが……」

名前なんてどうでも良いわよ。幽香はそう言ったあと

「私の波長を元に戻しなさい」

そう、続けた。

「出来ないとは言わせないわよ？　まあ、出来なかつたその医者に頼んで記憶を消す薬でも作ってもらうけど。私の考えが正しければ、今回私が陥つたのは、アンタの瞳力により相手に幻を見せる催眠術のようなもの。だとしたら、それが解けたとき、その時に体験した全てのモノを忘れるはずよ。全てとは言わず、その時に感じていた強い想いは消えるはず」

夢の内容を忘れるが、夢を見たと言うことは覚えていてる。

そう言った現象は万人が体験あることだろう。それを起きた状態で行うだけの話だ。

幽香は『少女と過ごした四日間』の夢から覚めようとしているだけだ。

【少女】という夢を見たことは覚えているが、「少女に関する事柄」と言う内容を忘れる。

それだけの、簡単な話。

「……考えを改めるつもりはないんですか？」

あらかじめ予想していたのだろう。鈴仙は縋るような視線を向けて来る。

「ないわね」

「言葉が過ぎますけど……。アナタのような妖怪でも、人を想うことができるんです。

その心を持ったまま、これからを過ぐすと言うのは」

「……正直な話ね」

幽香は鈴仙の言葉を遮って言った。

「辛いのよ……」

その場に居た一同は口を噤んでいた。

「あの子が居ない……。あの子一人に対してこれだけの激しい感情を抱くのよ？　これから先、それを何回繰り返せばいいの？」

人を想ったがゆえに知った『愛』は、幽香には重すぎたのだ。

「こんな思いをするくらいなら、人間と関わりたくないわね。……こんな思いは、一度経験するだけで十分よ」

有り体に言えば、幽香は臆病になっていた。

愛しい存在を喪うことが、これほどまで恐ろしいと思ったことはなかった。

「アナタ達も、暴走する私を止めることができるのかしら？」

今回はたまたま止まる事が出来た。しかし、抵抗をするのであれば相手を無力化するまで暴れるだろう。そうすることで、里の人間を傷付けることになったら元の木阿弥だ。何の意味も無い。

「そう言う意味も兼ねて、元に戻せって言ってるのよ」

「……」

鈴仙はちらりと永琳を見遣った。永琳は逡巡した後、小さなため息をついた。

「元に戻してあげなさい」

「……お師匠様」

「この騒動の原因を作ったのは私……。けじめはつけないとね」

永琳はそう言つて肩をすくませた。

「でも、良いの？」

「なにがよ」

永琳は悲しそうに眉根を寄せながら問いかけた。

「あの子のことを、あの子との思い出を……全部、忘れちゃうのかもしれないのよ？」

たった四日だけの思い出。長い時間を過ごしてきた幽香だが、この四日間だけは、黄金よりも価値のある日々だったに違いない。幽香はそれを、捨てようとしているのだ。

幽香は僅かに口角をあげながら

「時間が経てばどうせ忘れるわ。遅いか早いか……それだけの違いじゃなくて？」

鈴仙の目尻に涙が溜まっていた。文は「あー、すいません、目にゴミが入りました」と言つてこちらに背を向けてしまった。永琳は、聖母の如き微笑みを浮かべていた。

「そういうえば、ここに居ないヤツらはどうしたのよ」

「守矢の巫女は帰ったわ。てゐは……どこかで遊んでるんじゃないかしら？ 姫様は疲れたらしくて既に寝ているわ。河童には少し頼みごとをしてるの」

「どうやら、各々のやることに戻ったようだ。ならば幽香も、戻ろう。」

『風見幽香』に、「戻るとしよう。」

鈴仙は目をこしこし擦ると「私の目を見てください」と言った。幽香は鈴仙の前に立ち、その瞳を覗いた。

鈴仙の瞳に自分が写っている。

その幽香の表情は、とても、優しげだった。

「いきまます」

鈴仙の瞳が紅く光る。【狂気の瞳】が発動したのだ。

ズクンツ、と幽香の脳に衝撃が走る。

ふらつ、と足元がおぼつかない。

鈴仙にそのまましなだれかかると、幽香は倒れた。

ガラガラと音を立て、幽香の『記憶』が消えて行く。

少女との一つ一つの思い出が、真砂のように滑り落ちて行く。

幽香の瞳から一滴の涙が零れた。

時計の針は丁度、午前零時を指し示していた。

今日は、少女の、誕生日。

不意に幽香は、少女の名前を一度も言っていないコトを思い出した。

もう殆ど少女に関する『記憶』を失いながらも。

薄れゆく意識の中。

幽香はぼんやりと。

まどろみに誘われながら。

確か、少女の名前は

幽香は、ひと夏の夢に。
別れを、告げた。

最終話

「——痛っ」

思い出していたらズキンと軽い頭痛がした。

「何なのよ、全く……」

側頭部を押さえ、幽香はぼやいた。

「やめろーっ」

ハツとして二人の方を見ると、魔理沙が縄でチルノを縛っていた。幽香が考えこんでいる間に事態は進展していたらしい。

「何するんだお前ーっ」

「はっはーっ！ 天然の冷房ゲットだぜ！」

魔理沙は涼を取る素材を捕まえ、ドヤ顔を浮かべていた。

「さあて、帰って昼寝でもするかな。こどもも熱っちいと寝れないからな」

「はーなーせーっ」

魔理沙は箒に乗るとそのまま飛び立って行った。幽香はそれを見送った。

「……さて、ヒマつぶしも出来たことだし。花の世話でもしましょう——」

ぶわっ、と熱気を孕んだ空気が吹き抜ける。少し風が強かったので、幽香は目を閉じてやり過ぎす。

「あれ、幽香さんじゃないですか」

宙に視線を向けると、そこには守矢の巫女がいた。早苗はそのまま地面に着地した。

「何してんのよ、アンタ」

「いえ、風の通りが悪いと思っただんで、空気の入替え的なことを」

「風の強さを調整しなさい。今の風で折れた花があったら、折れた本数だけ歯を折るからね」

カタカタカタ、と早苗は戦慄していた。

カサ、と幽香の足に何かが当たった。見下ろしてそれを確認してみると、それはひまわりのドライフラワーが付いた麦わら帽子だった。

「……これは」

見覚えがあった。どこでどう見たのか忘れてしまったが、幽香はそれに見覚えがあった。

それに、このひまわりは自分が育てたモノだ。この近辺でひまわりを育てているのは自分しかいないのだから間違えようがない。

ドクン、ドクンと心臓は強く脈打つ。

ずぎぎザザぎぎザ、と不快な音が脳内に響く。

「……」

ごくり、と幽香は喉を上下に動かす。意を決して、帽子の中を覗きこんでみる。そこには、名前が刺繍されていた。

「――」

バチイツ、とスパーク音がしたのと同時に、幽香は激しい頭痛に襲われた。

「ど、どうしたんですか幽香さん!？」

早苗は心配をしているらしく、幽香の頭に手を触れた。

瞬間だった。

記憶が、蘇った。

この麦わら帽子のひまわりは、自分が作って与えたものだ。

知っているんじゃない。

忘れていたのだ。

幽香は今、思い出した。

「ありえない……ありえないわ……」

だって、この帽子の持ち主は。

先日の事件で――

「待ってー」

幽香は恐る恐る顔をあげた。

そして瞠目する。

そこにいたのは、死んだはずの少女だった。

暑さに脳がやられて亡霊でも見ているのだろうか。それとも、幽香の想像で作り出した幻覚か。

「えーりんせんせい、早く早くーっ」

少女らしき人物は手押し車とイスを足して二で割ったような道具に座っていた。随分使い込んでいるのか、随所随所には補修したような跡があった。

そしてその道具を押ししているのは、永琳だった。

「はいはい、待ってて——アナタ……」

永琳は幽香を見つけると、困惑顔を浮かべていた。操作を止めた永琳を、少女らしき人物は怪訝な表情を浮かべながら見上げていた。

「どうしたの、せんせい？」

「い、いえ……なんでもないわ」

ちよつと待っててね。永琳はそう言って幽香に近づく。幽香はいまだに現実を受け取ることができず、呆然と立ち尽くしていた。

「……帽子、取ってくれてありがとうね」

永琳は半ばひつたくるように幽香から帽子を奪い取った。そしてそそくさと立ち去ろうとする永琳に「待ちなさいッ」と呼び止めた。

「……」

「……なんで生きてるの?」

幽香がそう問いかけると、永琳はハツとして振り返った。

「アナタ、もしかして……」

覚えてるの? と聞いてきた。幽香は答えず、小首を傾げる少女に視線を向けた。

「……………」

永琳は少女らしき人物に帽子をかぶせると早苗に向かって

「少し話をするから、この子の相手……お願い出来る?」

「は、はい……」

早苗は少女らしき人物に近づき、膝を折って話を始めた。

幽香と永琳はそれを遠巻きに見る。

「……………」

幽香の視線は少女らしき人物に釘付けだった。永琳はそんな幽香の横顔を眺めながら語り始めた。

「まず最初に、あの子は本人よ」

アナタが愛した、ただ一人の人間の娘よ。永琳はそう言った。

「……………なんで、生きてるの?」

先ほどの問いかけを幽香はした。視線の先では少女と早苗が仲良さそうに話してい

た。

「あの子は自分で血を造れない。全くでは無いけど、微々たる量しか作れない。だから、手術とやらは出来ない。……アンタは、そう言ったはずよ」

「良く覚えているわね」

永琳は小さく笑っていた。

「確かに私はそう言ったわ。アンタ、あの時の状況を覚えてる？」

思い出したくもない記憶だ。しかし、幽香はあの時に感じた『命』の重さをしっかりと覚えていた。

血みどろの少女は息も絶え絶えで、僅かな衝撃で命を落としそうなほどに弱っていた。

「あの出血量を見て、私も流石に匙を投げようかと思ったわ。でも、その場に居た面子を、アンタは覚えている？」

「当たり前じゃない」

まずは件の少女。少女を運んできた幽香。風に加護で少しでも少女の延命処置をしていた早苗。悪戯好きのてゐ。仙人みたいな思考を始めた輝夜。そして、永琳の六人だ。

「それがどうかしたの？」

「アナタの能力はなんだったかしら？」

煙に巻かれているのか、と思つた幽香だったが、『花を操る』能力よ』と答えた。

「その質問に意味はあるの？」

「じゃあ、その場に居た人物の能力は？」

教えるつもりがないんじゃないだろうか。なぜそんな話とは全く関係のない能力の話をしているのか幽香には分からなかつた。

幽香は順番に思い出す。

八意永琳——『あらゆる薬を作る』能力。

蓬莱山輝夜——『永遠と須臾を操る』能力。

因幡てゐ——『人間を幸運にする』能力。

東風谷早苗——『奇跡を起こす』能力。

「……」

この四人で一体何が出来るのだろうか。

頭がキレルワケでもない幽香には分からなかった。

「ピンとこないようね。思い出して？ 私は一度も、あの子が死んだなんて口にしていないわよ？」

そんなはずはない。幽香が問いかけたとき、永琳は確かに

「……」

確かに、言っていないかった。もう何が何だか分からない。お手上げ状態だ。

永琳は種明かしをするのが楽しいと言いたげな表情を浮かべて

「そうね、この場合は二人だけに注目すれば良いかしら」

永琳は、言った。

「東風谷早苗が居ることで『奇跡が起き』、因幡てゐが居ることで瀕死の『人間が幸運にも』九死に一生を得た」

幽香はバツと永琳の顔見た。まさか、そんなことがあり得るのだろうか。

能力者どうしの異能が干渉し合ったとでも言うのだろうか。

「私も意図したワケじゃないわ。偶然にも、その二人がそこに居た。だから、私は賭けることにしたの。東風谷早苗が起こすであろう奇跡を。てゐがもたらす幸運を」

あの二人の、お陰だ。あの二人のお陰で、今も少女は笑って居てる。あの愛くるしい笑みを、幽香に見せてくれている。

「それと、あの子が患っていた病気も治ったわ。あの子はもう、他の人間となんら変わりのない健康体よ」

幽香はハツとして少女を見遣った。自分で血液を作ることができず、外部からの供給で命を繋いでいた少女。

少女を蝕んでいた病は『奇跡的に』も、『幸運にも』完治したのだ。

「……でも、何事も全てがプラスに働くワケじゃなかった」

永琳は悔しそうな顔をしながら少女を見つめていた。

「そう言えば、なんであの子はあんなものに座っているの？　つていうか、あれはなんなの？」

幽香が問いかけると、永琳は答えた。

「あれは私が河童に頼んで作ってもらった……そうね、言うなれば『手押し車椅子』と

言つたところかしら」

イスの座席の横に大きな二つの車輪が付いており、背もたれのところに取っ手らしき突起が二つあつた。

「殆どが木で出来てるから傷むのが早くてね。何回も補修してもらつてるわ」

だから所々歪な板が打ちつけられていたのだ。あの時、にとりは言つていた。『盟友』の役に立つモノを作りたい」と。

「話が逸れたわね。全てが万事解決、ハッピーエンド、丸く収まらなかつた」

「……」

幽香はその先を待った。

永琳は心苦しそうに告げる。

「あの子は記憶を失い、さらにはこの先の将来、自分の足で歩くことが出来なくなつてしまつたわ」

幽香は言葉を失つた。

「……どうして？」

たつぷり一分ほどかけてその言葉を理解し、幽香は問いかける。

「人間の脳はとても複雑なの。ちよつとのことで超人的な能力を開花する者もいれば、心臓は動いてるけど脳が死んでる状態にだってなるの」

医学的な話は幽香は分からない。永琳もそれを理解しているらしく、噛み砕いて説明をしてくれた。

「人はね、多くの血液を失ったけど生き長らえた場合……少ない確率だけど、記憶を失ってしまうの。そして、血流が障害されると脳に酸素が行き渡らず、ダメージを負ってしまい、それによって運動神経系がやられちゃう時があるの」

手押し車椅子に乗った少女はきやつきや言いながら早苗と遊んでいた。あの少女はもう、自分の足で地面に立つことが出来ない。

それだけでも幽香にはショックが大きすぎた。

「あの子は記憶を失い、かつての『あの子』ではなくなっていた。私は『あらゆる薬を作れる』能力を持っているけど……記憶を消す薬は作れても、失った記憶を甦らせる薬は作れないの」

だとしたら、あの時の無言の意味も変わって来る。『かつてのあの子』は死んでしまつたが、『あの子』は生きている。錯乱状態の幽香にそれを説明しても理解できないだろう

と踏んでいたのだろう。だから、あの時は誰も言わなかった。

「あの子は血を多量に失ったが『奇跡的に』病気が治ったが記憶を失い、血を多量に失ったが『幸運にも』生き長らえることが出来たが、歩くことが出来なくなってしまうたの』
マイナスの要因も併せ持つ。世の中はやはり、そう上手くは回らないらしい。

「失った血を取り戻すために、姫様の『永遠と須臾を操る』能力で空間の時間を引き延ばして処置をしたわ。本来なら一年くらいかかるところを、たった一日でやってくれたわ」

輝夜もまた、少女の為に能力を使ってくれたらしい。輝夜の能力を大雑把に説明するのであれば『時間の長短を操る』ことだ。一日を須臾の如く短くすることも出来れば、永遠の如く長くすることもできる。そうして、少女の血量を回復させていたらしい。

全てを語り終えた永琳は黙っていた。しかし、あまりにも沈黙の時間が長かったので幽香の顔を見た。

「良かった……生きてて……本当に良かった……」

幽香の心からのセリフに、少なからずも永琳は驚いていた。

鈴仙の能力により波長は元の『人間を見下す幽香』に戻ったはずだ。にもかかわらず、幽香は人間に対してそのようなセリフを述べていたのだ。

ぶわっ、と風が吹いた。どうやら早苗が調子に乗って風を起こしたらしい。

少女の麦わら帽子が宙を舞い、幽香の手に落ちた。早苗の方に視線をやると、早苗は小さくウインクをしていた。

本人は気を利かせたらしいが、余計なお世話である。しかし、悪くはない。

「すみません、少し力の加減を間違えてしまつて」

「アンタ、後で叩固めだからね」

なぜ!? と早苗は戦慄していた。

素直に感謝を言うことができず、幽香はつい暴力的なことを言ってしまった。

少女は幽香に近づき、見上げて来る。あの時は見下してしまつたが、今は見下ろすだけだった。

幽香は少女の頭に麦わら帽子をかぶせた。

「飛ばされないように、しっかりと被っておきなさい」

その声色は、いつもの幽香ではなく、『母親』のような優しさがあつた。少女は幽香を見上げると、満面の笑みを浮かべて

「ありがとう、おねいちゃんっ」

幽香の胸に、『愛』が、溢れた。

抱きしめたい。抱きあげたい。

あの時そそぐ事の出来なかつた『愛情』を。この胸にこみ上げて来る愛しさを。溢れんばかりの『愛』を、この子に向けてあげたい。

幽香は少女を抱きしめようとしたが、やめた。代わりに麦わら帽子の上から少女の頭を撫でる。

「大切なモノなんでしよう？ ……無くすんじゃないわよ」

少女は不思議そうな顔をしていた。どうしてそんな事を知っているのだろう、と良いたそうな顔をしている。しかしそんな表情を浮かべたのは一瞬だった。

「うん。これは、私の大好きな花だから。もう死んじゃったけど、おかあちゃんが言って

たの。『アンタの名前は太陽よりも眩しい笑顔を咲かせてほしいって意味がある』って」
ああ。ああ。

まさしくその通りだ。少女はまさに、その花を体現させている存在だ。

その名に恥じぬ、美しき少女だ。

「私、そろそろ帰らなくちゃ。ばあばが心配する」

「じゃあ、私がこの子を送って行きますよ。ついでに里で布教活動をして、守矢の信仰を集めてきますっ」

しんこー？ と少女は首を傾げていた。

少女と早苗は方向転換をして去っていく。その背中を見送りながら、幽香は呟いた。

「……アンタのところの姫とこんな話をしたわ」

「輝夜と？」

永琳は意外そうな顔をしていた。

幽香はあの時の輝夜のセリフを思い出す。

「人は様々な物を忘れる。勿論、『愛』も。なんて悲しいのかしらね。それだけの感情を持つていたのにそれすらも忘れてしまうだなんて。『愛』なんて、朽ちてしまうのよ。

……ねえ、月の医者」

幽香は震える声で言った。

「確かに、私は今の今まであの子のことを忘れていた。元の自分に戻って、忘れたの。自分で望んだ事とは言え、私はあの子に対する全てを、忘れていたの」

「……」

「でもね。でもね……」

幽香は胸に手を当てて言った。

「この『愛』は、朽ちていなかったわ……」

少女に向けていた『愛』は、朽ちていなかった。だとしたら、少女のことを抱きしめたいとか、愛してあげたいとか思わないはずだ。

元に戻った幽香にも、確かにあったのだ。

忘れていた幽香にも、残っていたのだ。

少女に対する、溢れんばかりの『愛』が。

愛したいと願う、幽香の『ココロ』が。

「……私はもう、あの子には近づかないわ」

「……正気？」

永琳は目を見開き、その理由を尋ねる。

「元に戻ったアナタにもあの子に対する愛があることが分かった。あの子は記憶を失ってしまったけど、だけど、これからだつていくらでも関係を築けるじゃない。それこそ、アナタが望んだ——」

「所詮は人間と妖怪……。越えられない壁があるのよ。……それに、いつかは子離れをしないとね」

人間と同じ体構造をとつていても、中身は違う。異形の技をその身に宿し、長い歳月を生きる存在。それが、幽香たち妖怪だ。

「私はあの子に近づけないけど……。私の代わりが、いつもあの子の傍に居る」

自分が与えたひまわりの飾り。それが幽香の代わりに、あの少女を守ってくれるはずだ。

ひまわりの花言葉は『崇拜』や『光輝』、『にせ金貨』だけじゃない。

「ひまわりの花言葉は……『私の目はあなただけを見つめる』」

永琳は寂しげに答えた。

「知っていたのね」

幽香は目を閉じてそう呟く。

離れていても。あの子が、私を忘れてしまったとしても。

幽香の目は、あの少女だけを見つめ続ける。

決して届くことのない愛を、少女に捧げよう。

「ということは私は……失恋をしたのかしら？」

少し違うようで合っていそうなセリフに、永琳は何も言うことが出来なかった。

愛しい存在は自分のことを忘れてしまった。そもそも、人間と妖怪が仲良くしている方が異常なのだ。

あの日々は、幽香にとって、まさに夢のような時間だった。

「……ねえ、月の医者」

「……なにかしら」

「今日は……暑いわね」

何を当たり前のことを言っているんだろうと思った永琳は幽香を見た。

「……。……ええ、暑いわね」

僅かに目を見張った永琳はすぐに相好を崩し、微笑みを浮かべていた。

「こども暑いと……汗が流れて仕方ないわね」

「……ええ」

永琳はそつと幽香に近づき、頭を抱き寄せた。

「……なにしてんのよ」

「汗はすぐに拭かないと、身体に悪いのよ」

「……」

永琳の遠回しの優しさが、嬉しい。

幽香は目から汗をポロポロ流していた。止め処も無いそれは、次々と溢れては永琳の

胸元を濡らしていく。

幸い、今日も蝉はうるさく鳴いている。多少は大きな声を出しても聞こえないだろう。

日輪草の別名を持つ花の名を冠した少女への、とある妖怪の届くことのない愛の歌をかき消すように、蝉たちはさらに大きな音で鳴り響いた。

「ばいばい、——」

—少女と花畑の妖怪—
了